



022440-000-2

特64-355

雲耶山耶(草鞋竹杖)

戸所 竹雄 / 編

M34

ADB-0095





14  
576

草鞋  
竹杖

雲  
耶  
山  
耶



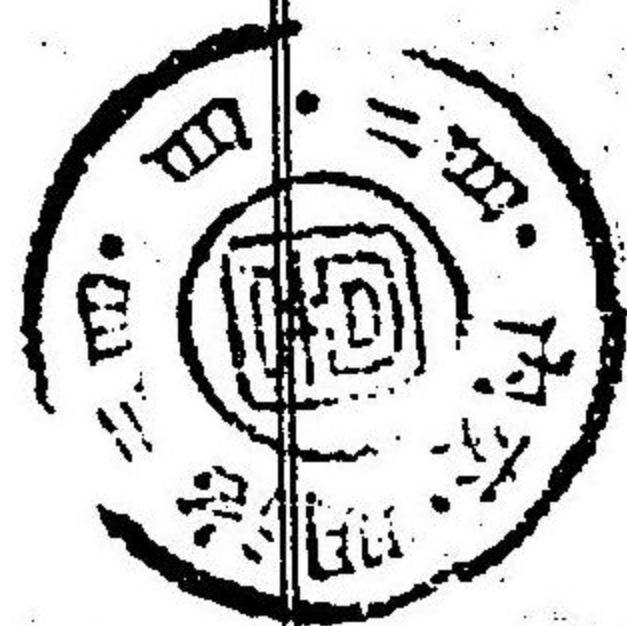


特64  
355

帝國少年議會編輯局編纂

草鞋  
竹杖

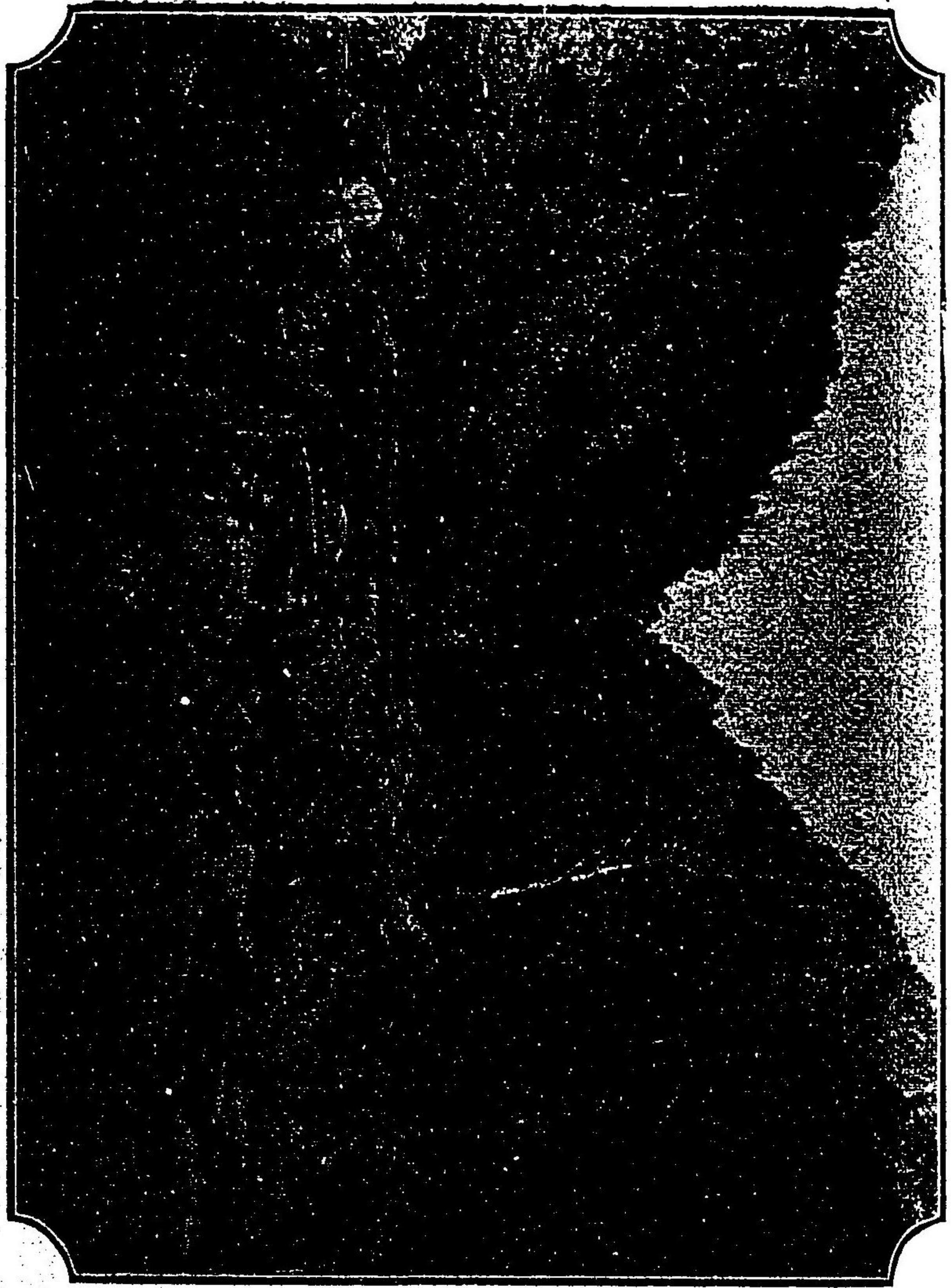
耶山耶



東京

博報堂出版部





流溪の中山父株

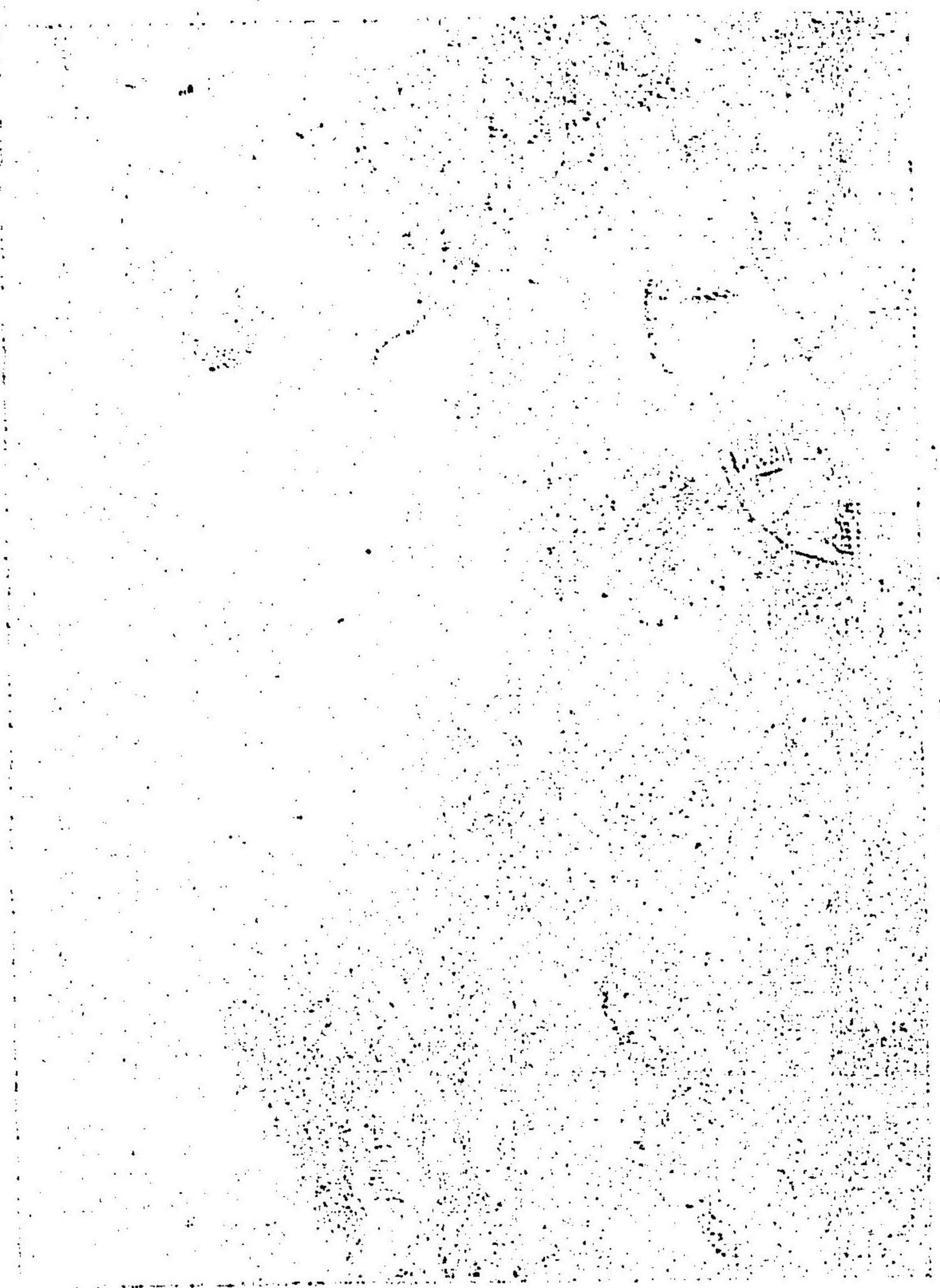
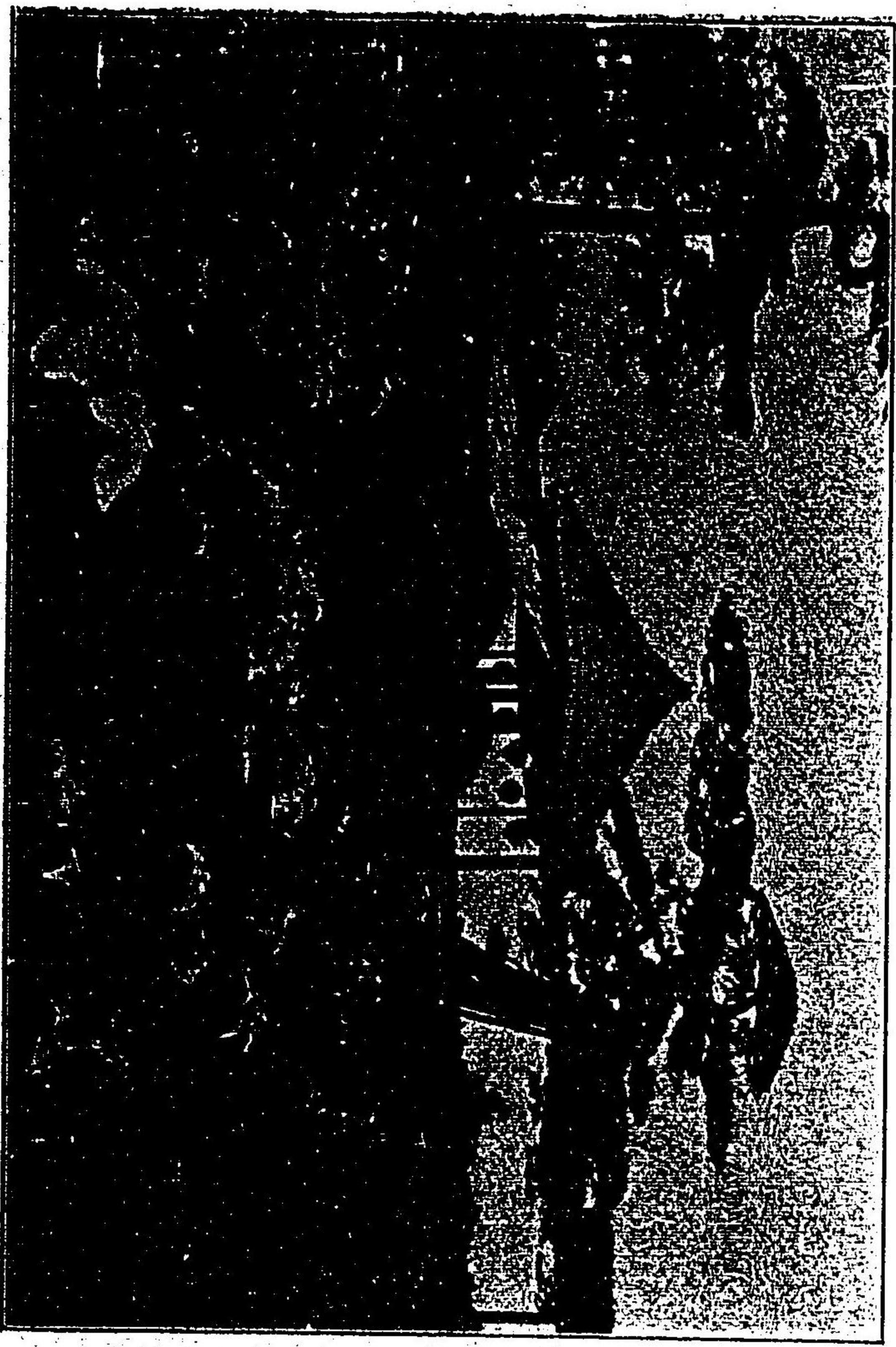


浦 錦 邊 飛



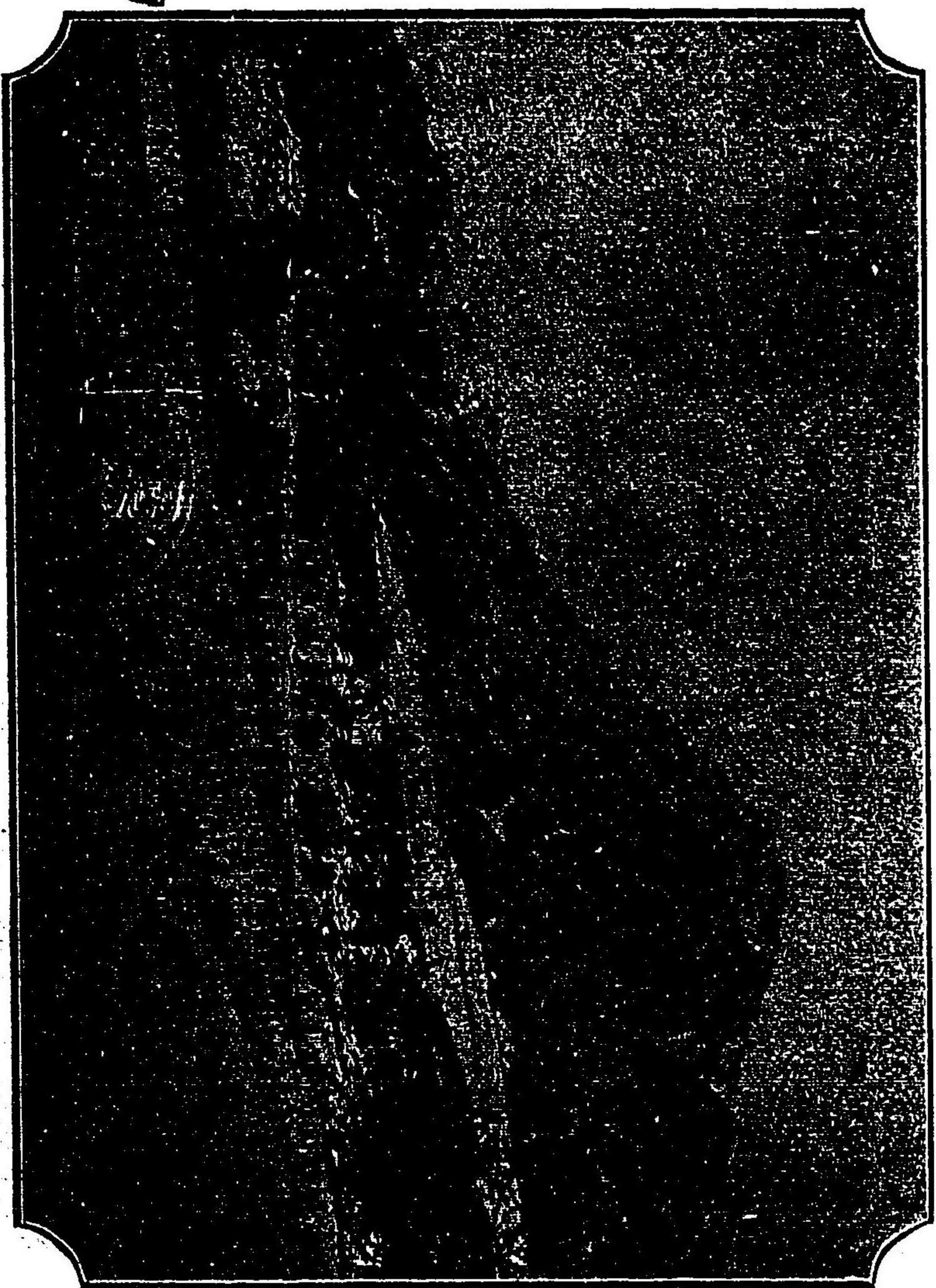


切 細 京 東





武 甲 山 の 雪 泉

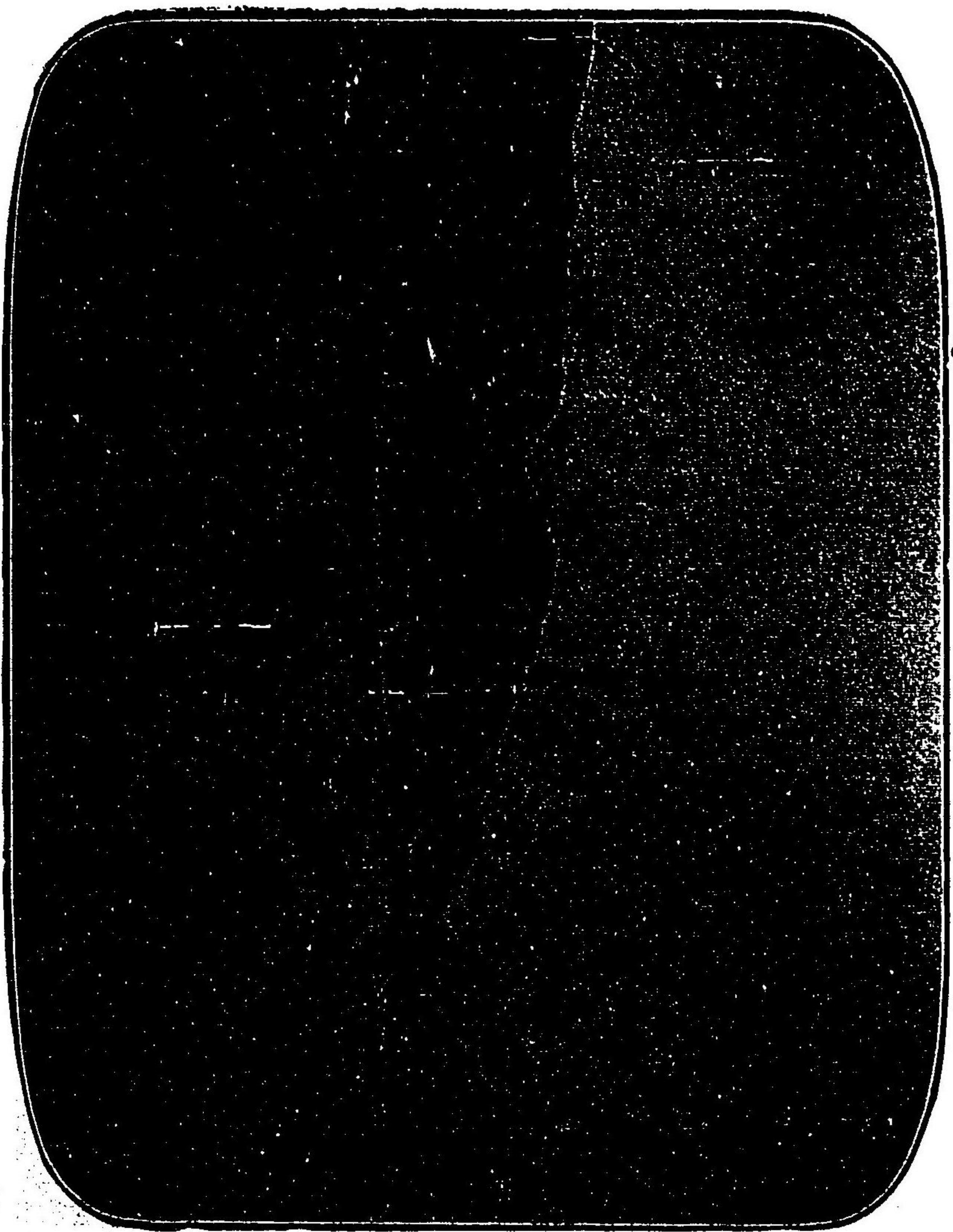


7



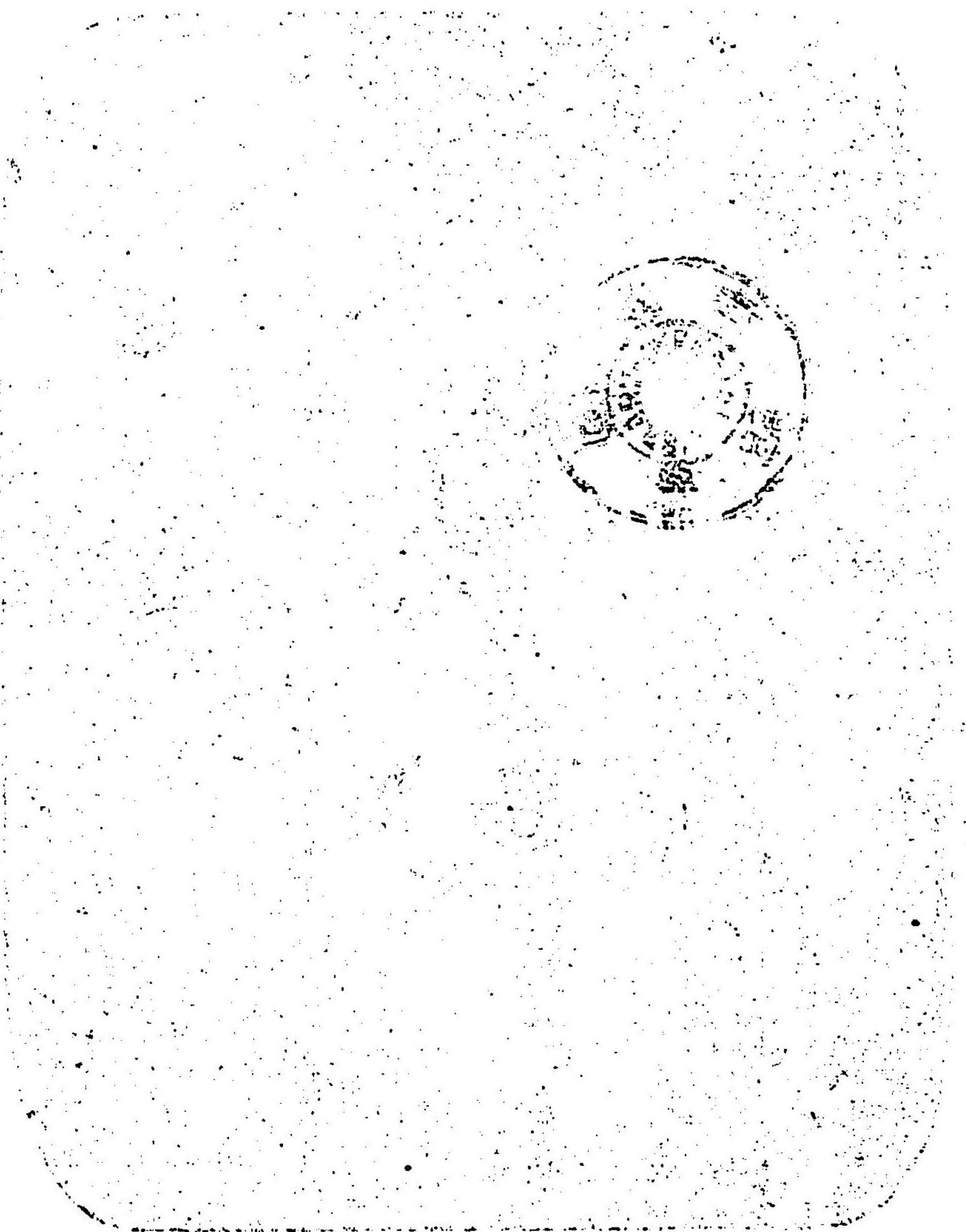


川 瓦 長 卓 岐

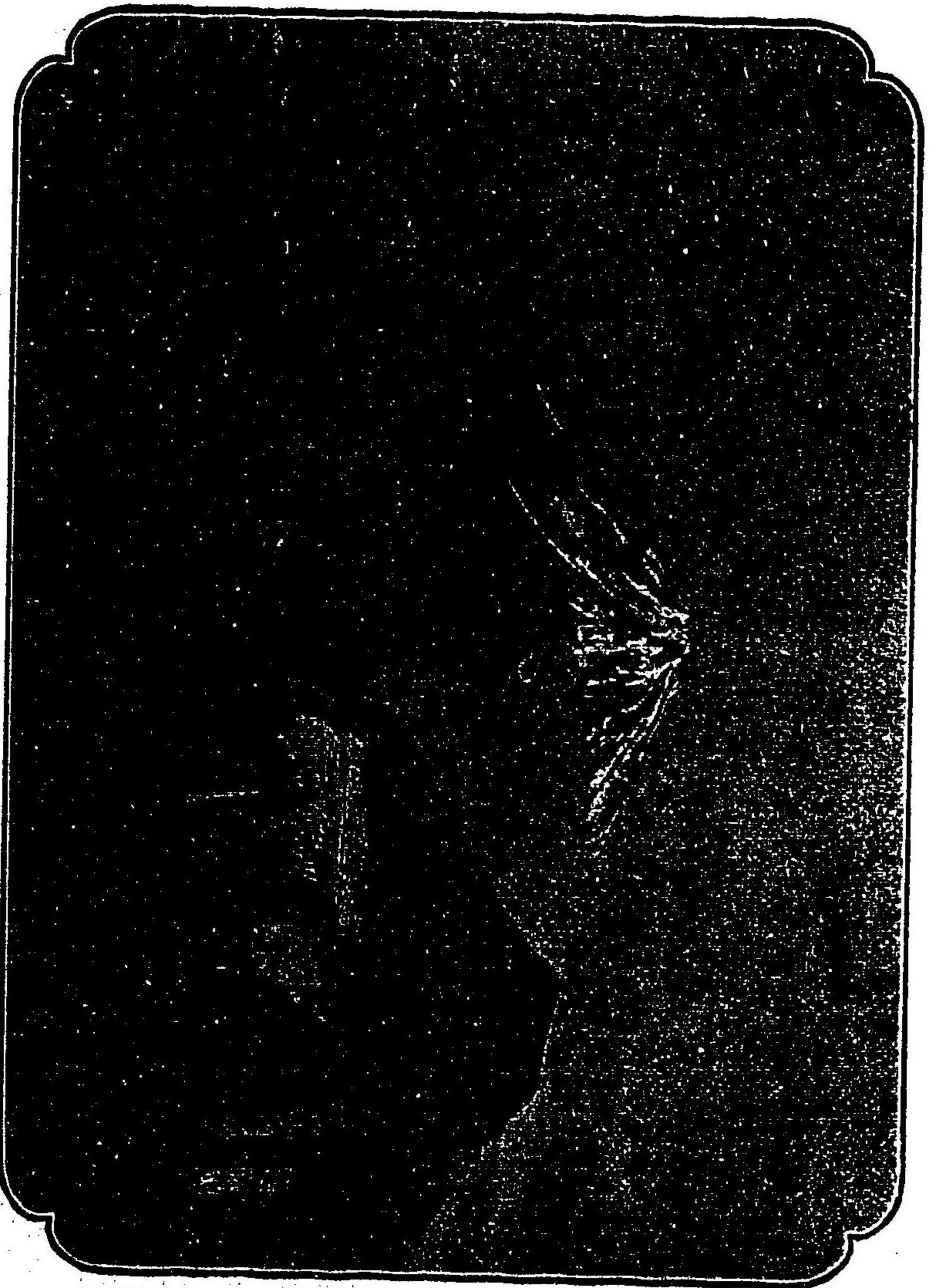




堂月二真茶







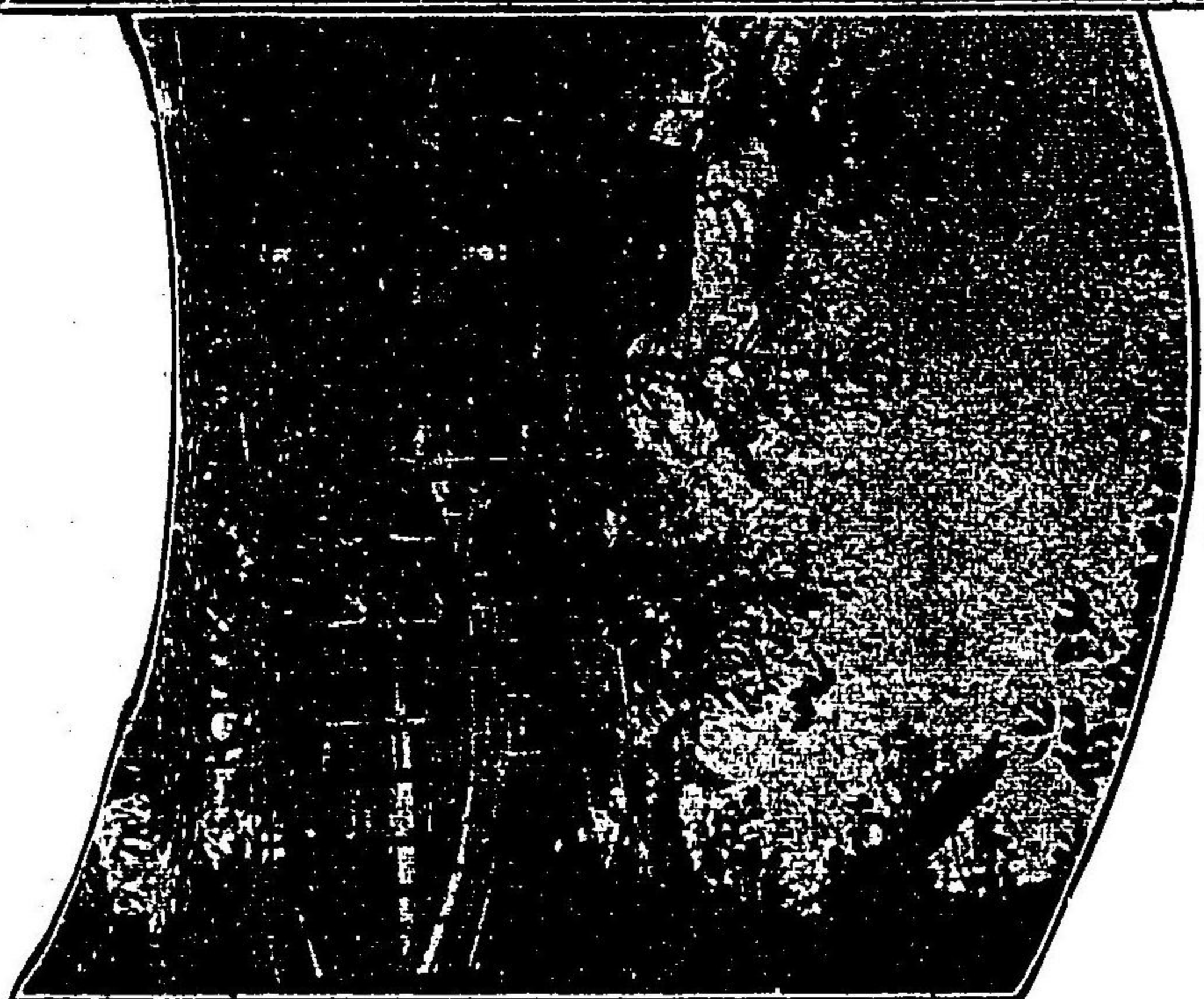
士 富 の 川 鈴







峽山老養



山溪虎瀟美





## 序 言

「雲耶山耶」は、旅行の紀事を集めたる小冊子なり、而して、其紀事は、世にありふれたる、贅澤三昧の徒の筆にあらず、又た、冗長華麗の字を列ねたる文にもあらずして、活潑質樸なる健兒が、三寸の草鞋と、一條の竹杖を伴侶として、名山大川を踏破りし實歴を、天真爛漫の毫にのぼしたるものにて、この文弱なる時世にありては、稀に見る快心の書たり、卷中の紀事が、如何に活潑に、如何に大膽に、如何に勇壯に、如何に多趣なるかは、これを讀者の批判に任せん。尤も、吾人は、この一



卷が、小年子弟に最も適當せる讀物たると同時に、烟霞の痼疾ある者に向ふて、亦た、胸中を洗滌するに足るをを斷言して憚らざるものあり。

明治辛丑春日

編者一識

雲耶道

雲耶道

○閑雲流水

慎獨子

○雪中登嶽

啣骨生

(附登嶽餘談)

○石鐘山紀行

澗水子

○不遇の山水を訪へ

茗溪漁隱

○雪の中津川

三篋笠

○清風臥談

不可知山莊主人

○握飯旅行

江湖山人

○雨の夜

山かづ

○遠足の快樂

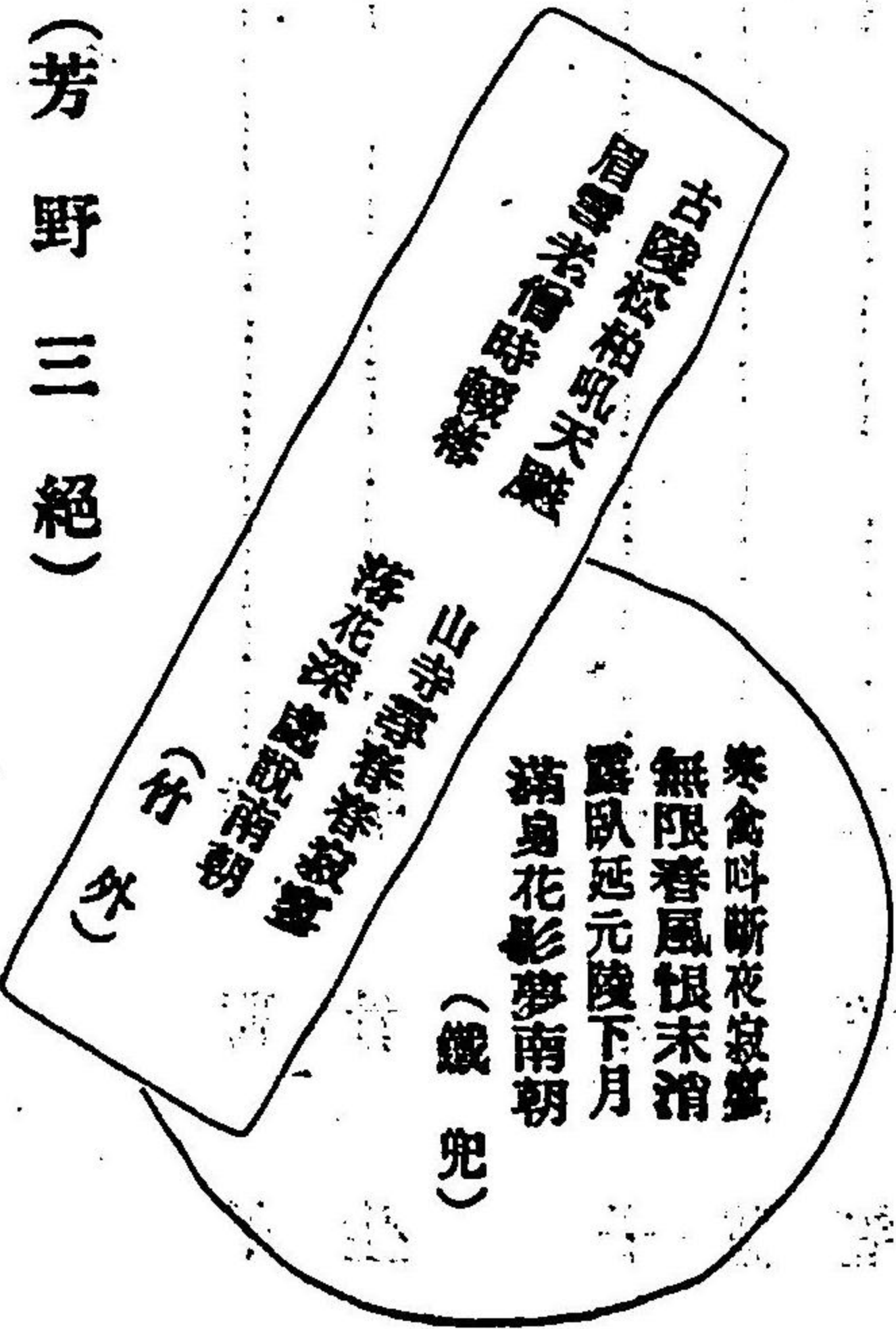
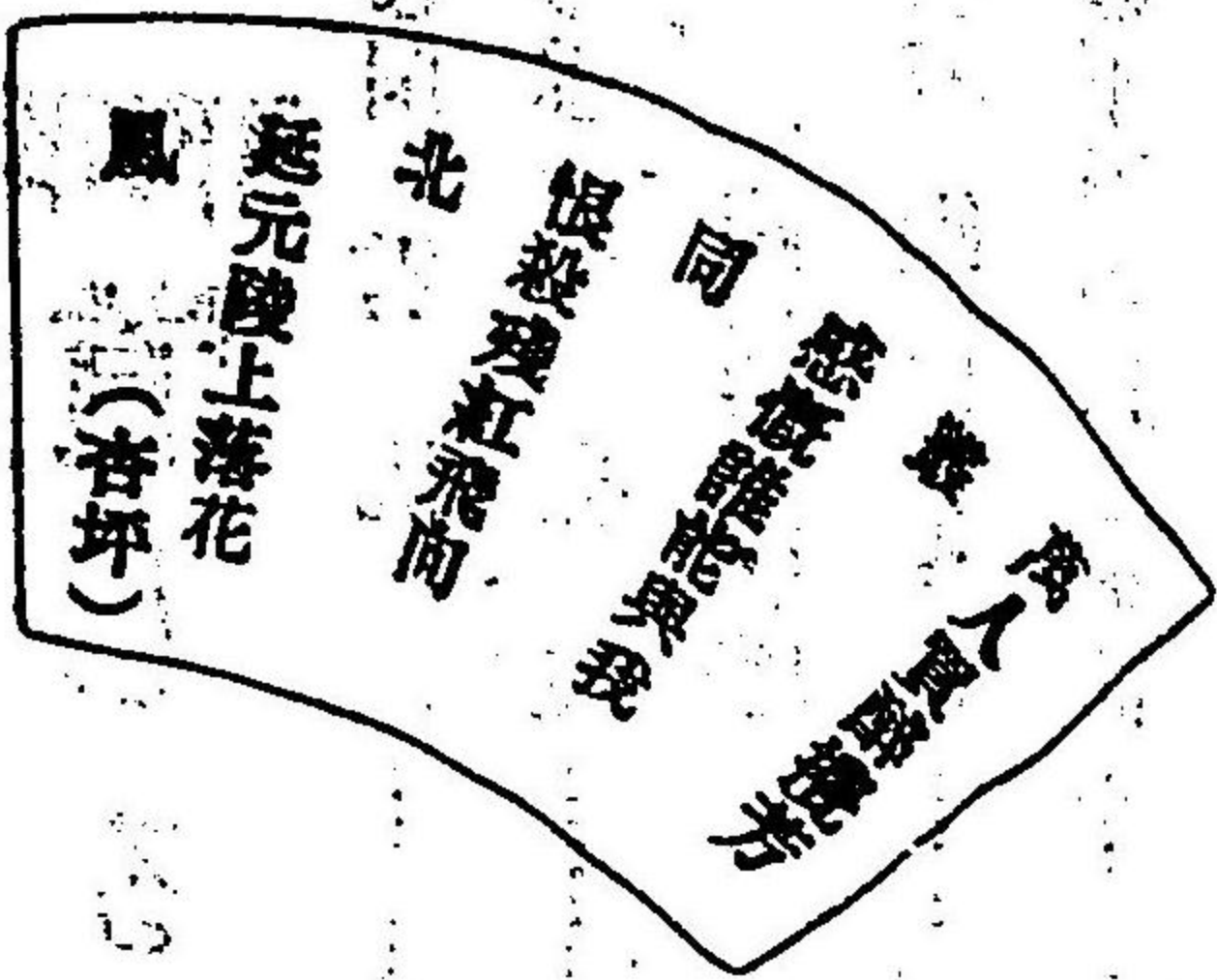
鐵脚子

次

目



- 貧乏旅行の七難……………吞雲
- 怒濤澎湃……………遠洋漁長
- 三春の行樂……………みのかさ
- 運だめし……………白雲



# 雲 耶 山 耶

○白雲のたなびきわたる足東の山のかけはし今日やこえなん……………貫之  
○いつくにか今宵はやさなひの衣日も夕ぐれの嶺のあらしに……………定家

## 閑雲流水

慎 獨 子

粗山醜水と雖も豈に庭前の假山水に優らざらむや吾人少閑あるも猶  
 鈴を郊外に曳かむと欲す、四時の休暇東西に放浪して、其長さを知ら  
 ざるもの亦宜ならずや、而かも旅行記は旅行家にして、初めて其趣味  
 を會すへく、旅行談は草鞋の穿き方さへ知らざる執袴子に對して語る  
 へからず、旅行の快樂は高潔なり、無邪氣なり、精神を爽快にし、全身を



強壯にすると、共に地理、歴史、博物、美術、社會上の智識を増進す、吾人は天下の青年諸子か、少なくとも旅行談を聞きて同情を感じ、旅行記を讀みて趣味を悟るに足るほどの素養あらんことを希望す、吾人世の所謂旅行文を見るに、些々たる一山一水を記するに、徒に雄偉壯快の文字を弄ひ、讀者をして煙霞の氣鬱勃たらしむるも、足一歩以其地を踏むに及びて「來て見れば」の感なきもの殆ど稀なり、是れ作者の意、山水の眞景を寫すにあらずして、偶々山水に托して以て我文章を誇示せむと欲すればなり、吾人思ふに、此等の徒は未だ山水の秀絶奇絶を知らざるものならむ、若し眞に秀絶たり奇絶たる所以を知らば而かく輕々しく誇大の文字を用ゆへからず。蓋し、古來文人騷客か、景の奇幻なるものに對して、我能く汝を寫すこと能はずと歎せしこと一再ならず、而して誇張に失し易きを戒め、筆寫す能はざるを省み、

添削宜しきを得て、其眞味を解するは是れ草鞋竹杖と親交ある者。古より有名の山水、之を遊覽者に問へば一顧の價値なしと答ふるもの往々是れあり、名物に旨い物なし、の俚言の如く、兎角評判はどにかさものなれども、然れども、觀覽には時節と場處とあるを忘るべからず、霜露既に降るの候、吉野山を探り、春風胎蕩の節、龍田川に遊ぶ如きは論外なるも、一目千本に到らずして吉野の花を賞するに足らずとなすは、吉野の花の賞するに足らざるにあらずして、見る人の之を賞するを知らざる也。且つや場合の變化又忘るべからず、同一の道程も場合に依りて趣味を異にす、健脚家に伴ひ氣息喘々として山頂に達したる者は、其山を以て峻峻となさむも、足弱連を導きて、休み攀ちたるものは、平夷となさむ、水涸れ石乾きたる時に涉りたる者は小河となさんも、雨後の増水を辛くも涉りたる者は惡河となさむ、天氣清



朗の日は愉快ならじも、暴風暴雨の日は苦艱ならじ。腹充ちたる時は、村名たも記憶せさらじも、一日絶食の後初めて民家を得たる者は終生忘る能はざるべし、時節、場處、場合様様、事様様、此に於てか旅行の快樂盡きす。

總て何事に限らず、經驗多き者は樂多き者也、旅行に於て殊に然りとす、山水を跋渉せむか、都會を通覽せむか、忽然として己が先きに經過せし所を想起し、彼此對照優劣類似を定む、而して前日の光景又展々として腦裡に描出し、神遊の快云ふべからざるものあり、天下著名の山水少なからず、都會到る所に之れあり、然れども其間異なる所少なくして、相似せるもの寧ろ甚た多し、吾人は其異なる所に似たるものを探り、其似たる所に異なるものを求む、蓋し經驗少き者の知り得ざる愉快なり。

近年寫眞の流行は、吾人をして一室に安居して天下の奇勝妙觀を樂むを得せしむ、然れども寫眞の術たる小を寫すに適して、大を寫すに適せず、名所古跡可なり、神社佛閣可なり、山川亦可なり、唯景の小なる者、夫れ或は實景に優らむ、而かも高山の白雲に駕して天下を小とするの瞰望は如何、蒼海の茫渺に鞭つて世界を廣とするの壯觀は如何、彼の磯邊の古松二三株を寫して、須摩舞子濱の景と題する如き何たる痴癡ぞや、百の寫眞は一の實見に如かず、况むや自ら跋渉したる所、之を寫眞に見て再遊の快感あるをや、又况むや旅行は其苦しき所其困る所に不可言の愉快を有するものなるをや。

吾人は高山に登て、自然的光景の勇壯なるに感奮すると、共に又信仰的事業の偉大なるに驚嘆せずんはあらず、見よ何れの地方にもせよ、高山雄峯にして神社或は佛閣の設けなきものは是れありや、開山の二字



は優に小豪傑を意味す、人跡未だ其路に痕せざるに當り、幾多の苦楚辛酸を嘗めて草叢を拓く、既に常人の企及すべからざる所、而かも其山頂に輪奐の美を極み、彫蟲の華を盡して、大伽藍を建立するに至りて、豈に亦壯とするに足らずや、昔者豪傑坊主の意氣愛すへき哉、吾人は高山に登りて、神社を拜し佛閣に詣つる毎に、彼の信仰心を利用して、吾人をして今日猶其遺蹟を想はしむる冒險的開山の人物如何を追想し、轉た感慨に堪はざるものある也

### 雪中登嶽の記

脚 骨 生

古人歌よて曰く、不差老圃秋容淡、且見寒花晚節香と、今の世果して

其人ありや、余この花に對して、斯人を思ふ事や深し、嗚呼當世の俗、區々榮華を尙び、徒に巧利に奔る、男兒四方の志、之を會得するもの、地を掃ふて空玄く深慮遠謀之を擧ぐるの人、遂に世を絶へて見るとなし、嗚呼已んぬる哉、先輩野中至君、夙に高層氣象觀測の必要を感じ、官に乞ふて自ら資を投じ、富岳劔か峰の絶頂に居を建て、越年の企てをなし、不幸半途にして病を獲られたりし一事は、今猶は世人の忘るゝ能はざる所たる可し、丙申の歳一月、君か病を山麓瀧ヶ原の民舎に養はるゝと聞き、敬慕の念禁する能はず、遂に其病床に侍して、君か温浴に接し、親しく其實狀と希望とを聞きて歸來せし事ありき、爾來三星霜其間富峯に登臨する事再度なるも、夏は紫雲の變難を望んで、會遊の快味忘れ難く、冬は白雪の皚々たるを觀て、常に寒中君か籠居せられし、困苦を懷想したりき、



戊戌の初冬、天寒く風荒るゝの夕、遙に西の方白芙蓉を望見して、登嶽の念連りに湧き、勃々の情、禁す可からず、即ち走りて山莊に歸り、爾來戸を閉ぢて百方其準備を盡し、豫め査して荷を小田原知友の許に送置し、茲に歳華を迎へ飄然として都門を出つ、

準備品左記の如し

一、衣服其他

- メリヤスシャツ 二着 獣毛製短衣 一着 フラチルシャツ 二着
- 毛糸 シヤツ 一着 手袋 三着 裏毛ツボ下 二着
- 獣毛襪卷 一着 ゲートル 一着

二、携帶品及附屬品

- 淡青色眼鏡 二箇 時計 一箇 寒暖計 一箇
- ナイフ 一箇 磁石 一箇 紅布 若干枚
- 西洋蠟燭 數本 ハンケチ 全上 釘 全上
- ピル糊粉 若干 鉄紐 一本 燭燭 二箇

- 紙、鉛筆 若干 提灯 一箇 測量地圖 八枚
- 細紐 數本 馬口 二箇 酒筒 二箇

三、食糧品其他

- 牛肉の小罐 一個 △スビ 數箇 醤油煮罐詰 二箇
- 食パン 一斤 寶丹 一箇 寶効散 若干貼
- 濟生丹 若干貼

正月五日、突として小田原の知友が居を出て、國府津より御殿場に至り、結束して午后八時登嶽の道に向ひ、中畑新道を取りて進む、滿目只寂寞、月々既に鎖して隻語なし、夏ならば春滴ると恠まるゝ鶯の聲、道を狭んで咲き乱るゝ秋草、山を急いで馳せ行く人馬、遙に梢を渡る樵歌牧笛の音も、今は仰いで滿天の星斗に嘯くの外、見る可くもあらずなり、老鳥何れの樹にか啼く、斷續連りなり、征衣しばしく蔓草に搦む、十一時一本松を経て馬返に着す、腰折あり



馬を返し休むてふ宿の宿守は、おまゝす軒に小夜風吹く、

鼻の聲も聞えて物さびし、富士の裾野の森の下道、

こゝより路漸く険、樹根縦横路を塞ぎ、枯葉堆積山をなす、寒風肌を  
貫く事刀の如く、寂寞の氣、凄愴の情、轉た太古原人時代の想を作さ  
しむ、或は樹梢に面を傷けて困しみ、或は露口を葛蔓に狹みて驚きつ  
ゝ、十二時前太郎坊に安着す、一に皆燈火の功なり。戸を排して躍り  
入り、更に燭を点して座席を占む、寒氣太だ嚴肅、火氣無くんば須臾  
も堪ゆ可からず、即ち室内戸外を搜索し、獲る所の木片炭片を集め、之  
を燃して暖を取る、一更二更夜は益深うして寒氣愈酷烈、戸隙より侵  
入する富士風は、轉た明日の天候を思ふて餘りあり、靜思すれば君を  
尋ねてより茲に數年、一片の冷骨、満身の涙と共に寄する處なし、暗  
中の響音に心耳を澄まし、夢を去今來に馳すれば、半生の血涙何れの

邊にか流る、萬籟死して双眼一瞬、胸底の靈光、僅に大宇宙の虚臺に  
觸るれば、冷凄の氣栗々として我魂を襲ふ、何事を今夜乾坤盡く白く、  
寒風骨を徹して体中の玄に入るとは、遂に一眠をなすを得ず、結伽炭  
火の明滅光を失ふに至るを見、食を行ひ即ち發足す、唐人の詩の天風  
阡作蒼龍眼、欲訪仙源骨已仙、とは正にこの境を歌ひしものか、時に  
四時寒暖計一度なり腰折あり、

破れ窓に寒さはまして高嶺より、雪吹きおろす山風の風、

曉の行手を急ぎ獨りして、富士の高嶺に冬登りする、

燒砂灰石を踏み、天を仰げば星斗滿襟、月高く空を射る、四顧沈々夜  
氣森然たり、獨り歩を上に通べは、覺ゆる天地參差の大景に打たれ、  
懼然として畏れ肅然として慎しみ、毫も人間塵埃の汚氣を雜へざるを  
覺ゆ何の鳥か一聲叫んで、此大寂寥を破るに違ふ、東の方一星更に二



星、西に向て落つるを見る、奮勇一番一高一低の砂上を歩み、四時半三角標に着す、寒暖計零度以下三度、四、一帯の地盤は凝結する事頗る堅く、毫も歩行に逡巡を覺ゆず、此邊より各所に積雪の點々散在するを見る、思ふ其昔運動界の健兒吞雪、獨り信州駒ヶ岳の險を登りて、造化の神秘を究め來り、英人ケー、エー、ストーベル、又十月の末日を以て、この山積雪の觀測の爲めに、登臨したりし事を、余れ尪弱氣魂なしと雖ども、何れぞ又人後に落ちんやと、元氣横溢連りに歩を移して五時半二合目邊に着せり、零度以下六度、一、六時三合目着、零度以下八、二、を示せり、この時西北の微風起り、人をして稍安危を憂へしめたり、又此邊より雪は次第に水と變化し、全山水封の景象に驚く、而も奇異なる硝子の如き氷衣は、吹き渡る強風の爲めに尖端を磨き、鋭き事は利刃に異なるなし、處によりて其厚薄に差異ある可きも、概ね

五六寸より、尺を越ゆる二三寸に至り、凝結の力又頗る堅さを覺ゆたり、これより齋口を打入して以て進行を續けたり、若し一朝にしてこの器を損し、若くは手足を誤つとあらんか、身は鋭刃に觸れて損傷するのみにあらず、奔馬の勢輾々然として落下するあるを知れば、深く自ら警めて之を防ぎたり、三合を過ぎ四合の間に至る、東天漸く白く須臾にして紅橙紫青、彩雲虚空に湧き、朝暾の昇るを見る、光彩陸離水面に映發するの美觀偉觀は、言語に絶し、秃筆に用なく、恰も獨り水晶殿中に座して、千萬の鋒刃を眺むるが如く、到底夏期の御來迎など、比較す可くもあらず、誠や帝京百萬の人士が、日夕富士の白雪と、遠望せらるゝこの雪山は、遂に雪の富岳にあらずして、宏大なる一大氷塊なるを如何せんや、嗚呼氷山水塊、造化の巧妙もここに到りて、極まれりといふ可し、腰折あり、



春を迎へ夢あたりの都人、いかで吹雪の山を知るべき、  
 いかにも人をたのまんと思ほへど雪は氷の滑り座にして、  
 雪しろく富士の高嶺の夜を寒み天の原より春あけそめぬ、  
 白妙にうちつむ山のこの雪をさりて包みて家土産にせむ、  
 まじろなる此山の雪をとりにて妹の顔の料にせまほしきかふ、  
 雪を呼ぶ龍さふりきてこの山に住みて住ひて世なかくねなん、  
 驟す、雲忽然として收まりて紫空天地清し近くは大原宏淵、林樹茅  
 舎、水田村徑、歴々として指點す可く、乙女金時の連山は東に西に、  
 足柄天城の山巒と翠鬢を聳かす如く、山中蘆の湖水は碧玲瓏、珠を浮  
 ばすに似たり、遠くは房總の山水、遠三の地形、皆一眸の下に集る、  
 これより淡青色の眼鏡を以て、絶えず光線の反射を避けつゝ、八時四  
 合目邊に着す、零度以下八、八、九時半五合に着す、この時風力衰へて  
 毫もこの患なし、これより只管前進に力め、誓て前後左右を顧みざる

に決せしも身体に纏ひしもの、重量と、且つは漸く呼吸の切迫を感じ、  
 一步一休悸慄しつゝ、戦々競々として其歩を進めたり、  
 体疲れて、幾度下山の途に就かんとせり、然れ共今半途にして歸り去  
 れば、登岳の計畫盡く水泡たるに同じく、重ねて山上今日の積雪状況  
 は如何なりや、測候所は舊の如くなりや、賽の河原の有様は如何なる  
 や等を知るに由なきを思ひ、幾度か躊躇の中に、勇氣を鼓し十時五分  
 六合目邊に進みて一休したり、これより猶も前進を続け、辛くも露口  
 を打込みつゝ、一步は一步よりと心頭に念じて、八合目へ左回するを  
 止め、寶永山列頭より、進んで一直線に行進をなしたり、絶代の天柱  
 乾坤を貫ける氷塊は、愈固くして攀づべくもあらず、漸く白雲に駕し、  
 徐々として進み行けば、俄然銀明水の處に出でたり、吾れ知らず万歳  
 を三呼して武運長久を祝す、時に十二時三十分零度以下十六度、一、



十六  
 身体石の如く疲勞甚だし、石壁の間に身を投して懃ひ、携帶行糧を食ひ、酒を出して苦を忘る、焼餅は堅氷餅と化し、到底食す可くもあらず、深く包みしパンも乾燥無味にして不味いふ可からず、梅干魚鱸のみ無二の佳肴なり、淺間神社に詣づ、神威殊に崇高を覺ゆ、凍氷の横様につらゝとなりて併列するもの、小は豆大より大は尺を越ゆるもの、累々として石壁の側面に生じ、甚しきものは下より逆まに天に嘯くものあり、一見特に奇異なるに感ず、こゝより馬脊の如き險を越し、引弦の如き難を凌ぎ、幾回か逡巡幾回か考慮、鋸齒の如き氷上を匍匐して進み遂に劍ヶ峯の測候所に着せり、冰窟依然舊態を存すれ共、今は誰人もあるとなし、風雪徒らに門戸を襲て、居跡頗る荒寥、徐るに當年、君か越年の辛苦を懷想し、科學の爲めに一身を捧ぐるの、勇氣義心に感佩したり、俗天下一に滔々として利己のみ、學者といはず、

工商といはず、志士といはず、皆國を思ひ民を憂ふるか如くにして、實は國を賣り祿を盗むか如きの類のみ、君が如く毅然として其風潮以外に立ち、節を持って學に奉ずる事深く、十年の苦心之を表する事厚きもの、天下何れの處にか求むるを得ん、  
 斯て引返し塞の河原に向ふ、果然全處には些の雪積を見ず、景色例に依て佳、十三州の山河分明に瞰視する事を得たり、必竟するに造化の大經濟も遂に雙眸の外に洩れず、山河の配置亦自ら天命を示すに似たり、乾坤大なりと雖ども、悟了すれば確に浮動の元素に過ぎず、弱國も俯視すれば、又一氣に外ならざるを知る、暫らく此處に休息し、今回野中測候所の、この地に建設せらゝの適當を思ひ、腰折一首を詠して、下山の途に就く、

山にのぼりたなびく雲を見下せば、其下に見ゆる人の家かな



十六  
 呵々獨り大笑して來路をたどり、後ろ様に匍匐して降り來る、偶々西の方白雲起る須臾にして濛々細雪來り、危険困難名狀す可からず、胸邊の磁石を案しては、只直下するに急なるのみ、幸にも天候順に復し事なきが如くなるを以て、急行するに決し、銳刃劍の如きの冰端を傳はり、或は立ち或は匍ひ、三時五合邊に着、一休し猶ほ前程を測りて降りしに、誤て一轉落し遂に展轉落下して鳶口の支ふる處となり、只酒筒一箇眼鏡一箇を何れに飛ばして、事なきを得たりしも、腰部膝頭は被服の損傷を見たり、これより猶ほ深く警めて降り、遂に五時前太郎坊に歸着し、こゝに遺し置きし、小包を取り、獨り酒筒の甘露を痛飲し暗中高吟して枯茅の原野を急ぎ來る、澤畔日暮れて萬象聲なく、池邊荒寥として天地寂たり、昔は大將軍のこゝに狩し、高樓瑤臺を築かれしと聞くも、金馬銀鞍の跡何處ぞや、孝子雨夜に、裾野の敵を刺せし

と聞くも、紅顏玉骨の墳何處ぞや、今更なから夢の如き、雲鬃鳳釵を思ふも果敢なし、古松の曠に駒の嘶き聞ゆ、暗中驛舎の近づくを知る、七時半御殿場の宿舎につけば、鼓腹の民酒を置きて、絃歌を奏するを聞く、喧騒堪ゆ可からず、即ち氣車に乗りて國府津に下車し、松風莊の知友を誘ひ、談話して眠に就く、翌、早朝車を馳せて小田原に赴く、望見すれば、朝陽影輝きて富岳白扇の如き處、正に是れ萬首の詩覺を包み、斷雲連峯に渡りて虚空色を彩るの邊、此に是れ千幅の畫趣を藏するを覺ゆ、嗚呼霓裳羽衣、天女の如く、清高なる富岳、鐵衣玉鞍、颯爽たる武人の如き富岳、其温容威嚴万古變らず、白雲黒雲、積雪潰雪、閃電猛雷を用役願使するの武威、誠に敬す可く愛す可し、今余獨りこの山に登り、彼の氷を踏んで、偉人の居跡を觀、威容を愛する詩神と逍遙して歸り來る、意氣一に清楚、轉れ心神の皎潔を覺ゆ、忽ち



城南知己が家に着す、即ち山上の景象を語り盡し、杯を擧げて相酌じ、共に語て曰く、世の學者詩客畫家文人等、單に富岳を望んで、一に雪の衣を被き、白雲の頭巾を被る、恒久の佳人とのみ云を止めよ、雪中の玉容を知らんと欲すれば、須らく蝸牛の廬に談るを棄て、雪中の登岳を試みよ、満目の風物悉く新奇、眼底に映する雪山水封の變景は、必ずや前人未知の天地を歌ひ、筆にするを得んと、こゝに行李を托し匆々辞して、東大津の水廊に入る留る事一日、都門塵俗の裡に歸來すれば、依然として巷路に松飾嚴しく、樓臺に屠蘇の薰深し、富岳の詩神富岳の崇高を思へば、轉た人界の臭きを覺ゆ、借問す堂々天下の士果して、幾千の至誠熱血ある嗚呼已なかな、希くは春宵一刻の夢、銅馬に鞭ち白雪を蹴り、堅氷を破りて富岳の頂上に登り、更に馳せて詩神と語らん、

### 登嶽餘談

寒中の登嶽を企てらるゝ御方も有之べくと存じ、御注意までに左の件々を申上候、

一は自らの經驗と、野中君はじめ諸先輩に相尋ね候事を、記載致候次第に候、山は思ひしよりも積雪少なく、山骨或は積々たる箇所不少、寶永山の南端、親不知といふ處並に二合目以下は之を見ず、頂上も思ひし程には無之、塞の河原も積雪を見ず候、又強烈なる風力に依りて、雪は直ちに吹き去らるゝと同時に酷烈なる寒威に依りて氷も變化致し候へば從て全山水封の有様なる次第に御座候

寒氣は登るに従ひ甚たしき様に候も、これも想像の半ば位にて候、石室も埋没したるもの多く見申候、氷上を登り行くに候へば、反て比較的夏期よりも足の運び易き様にも思はれ候、時間も七時間位にて頂上に到るを得可く候猶左記御一讀願上候

一、天候を撰む可き事、

寒中の登嶽につきては、最も必要の事と存じ候、夏期と異り候より、若し登山中途にして、不慮の強風、吹雪等に出遭ひ候へば、之を避



くるの場所無之、従て不測の危険を生ずる事なしと限られず候間天候は必ず各地出發の際見定めたる上、猶ほ山麓にて古老に風向雲行など聞き合せ可然、決して輕舉はなさるまじく候、

二、一行は必ず三人より少なからざる事、

單獨の登山にても、充分の氣力と準備と注意とを以てすれば、宜しく候へ共、萬一の事有之候場合、三人とすれば三人の智恵も出づ可き道理、従て御互に勵み合ひも出で、遂行致さる事と存じ候、

三、結束に注意を要する事、

兼て裝束は薄きものにして軽く、風を透し難きものを、用ゆ可しと教はり候もの、寒國に在りて、雪中を登山致したる事なく候へば雪塊氷封とは如何なる物なりやと、知るに由なく候より、無暗に着込み候ひしも、左程の功能も無之、四枚着るも五枚着るも、暖かさ

に相違無之かりしには、失敗致し申候、而して重くなきものは、殊に必要にして、綿にて作り候シャツ、獸毛製のチョッキなど、至極適當品と存候、

帽は固く着きて風などに飛ばざるものがよろしく毛糸製のもの、左なくば圓錐形のもの可然やと存じ候、

眼鏡の必要は申す迄も無之候へ共、鐵線のものには假令綿を巻き候共、籠甲線のものよりは悪しく候、これは遼東半島邊にて支那人の用ゆる玉の頗る大なるものよろしくと存じ候、色は淡青色淡紅色など可然考へられ候、

鼻は中々寒さこたへ申候も、呼吸よりの點にて如何共する能はず、只折々襟巻にて掩ひ候處、後日まで傷を覚え申候、咽喉部は深く襟中迄毛皮にて包み、吹雪等を防ぐに注意致候、脚部は就中足指等を



眞綿フランチル等にてよく包み置く事肝要にて候、こは深く注意を要し候、左もなくば凍傷と申す難有紀念を戴き可申候、

靴は鐵底靴にて裏に圓錐形の針の出で候野中君考案のもの最も適當と存じ申候、堅氷の候にては、この鐵靴ならでは登る事困難と存じ候、この靴は確か下谷區仲町通り塚田靴舗に於て製造の經驗あるよし、代價は大凡五圓位に存じ候、

ハンパキは常に必要有之、脚部を冷さず最もよろしく候、小生は經驗のため左る特志家より秋田にて作らせ呉れ候ものを用ゐ候處、非常に役に相立ち申候、

カンチキは二三月頃より解雪の時代に於て最も必要と存候、權造草鞋も同と様存じ候、

手袋は皮のものは悪しく、決して御用ゐなざるまじく候、小生は毛

糸にて腕へ深くはめられ候もの二着をつけ候處、案外宜しく感じ申し候、猶ほ以上考案中のもの少なからず候、

鳶口は鐵の丈夫受合なるものと、柄のこれも丈夫なるものを用ゐざれば、危険至極に候、小生は經驗のため柄の長さものと、短きもの(この方は左る有志より寄贈にかゝるもの)を携へ候處、短き方のもの製作法不完全なりしと見ゆ、途中にて柄元より折れ、頗る困難致し申候、生命の種とも申す可きものに候へば、何に致しても、この器丈けは丈夫一式なるが千萬の必要と存じ申候、

四、食糧品を携ふる事、

食糧品には最も困難を感じ申候、食パンは固く包み候も、猶乾燥致し申候、こは五六分の厚さに切り、塗るにバターを以てし、上を綿にて作りし風呂敷様のものに包み候へば、案外の結果なる可きかと考



へられ申候、

ムスビ、焼餅はカリ／＼と固く水餅位に變じ候て、到底食す可くも  
あらず候、鯛の油積、この鑑詰丈け、稍々口に適し不味ならず感じ  
候、

酒は山下宿泊の節、寒氣を凌ぎ、山上食を行ふ節用ゆる爲め、ブラ  
ンデー少許を携へ候も、功能無之中途屢々之を試み候處、反て心氣  
の兀進を見候のみならず、種々の注意を忠却致し候、山には必要を  
見ず候、

水や氷は之を口にす可からず、誤てすれば唇邊に固着して裂傷を見  
る可く、假令口にする共、之を溶かす熱を要し候故、爲に反て渴を  
訴ふる事甚しく候、登岳の前には平素食後に、湯水を吞まざる事、  
渴を抑制する習慣をつくる事肝要に存じ候、

五、宿泊の節注意を要する事

道路は中畑口を取る方、便利と存候、却説山麓にても寒氣中々に強  
く候故、焚火を行ひ防寒の方法を取る必要も有之候へ共、餘りに暖  
さをとりての上に、就眠をとり候へは、心地よさにひかれて、或は熱  
睡に陥りて登山の時刻を失ひ、或は感冒に犯されて後日の大患を引  
起す原因となるも知れされば、可成日中熟眠をなし、夜分山下にて  
は無用たる可き方可然存じ申候、

六、用意す可き品

登岳につきては、猶ほ薪炭焚附の用意可然、こは瀧ヶ原に求めらる  
可く候、耐風マツチ蠟燭の類は最も必要にて候、  
藥品も是非必要に存じ候、山下出發の以前實效散を服用致置事は、  
腹辱と避くるの點に於て第一義に存じ候、其他寶丹、清心丹、濟世



丹の類頭痛腹痛を覚え候時に、最も必要と存申し候、  
 登岳の困難は、實に氣壓の薄弱に因て、太く呼吸の切迫を感じ、從  
 て胸痛を催し候へど、決して寒氣にては無之候、寒さは酷烈には相  
 違なきも、要するにこは吹き渡る風のためと存じ申候、今回は幸に  
 して殆んど風の困難を見ざりし事、誠に天幸と存し居り候、  
 猶ほ寒中の登岳は、未だ一回も夏期に於てなされざる方は、御扣へ有  
 之べくと存じ候、小生は性來この山を好み候のみならず、嘗てより  
 寒中登山を思ひ居り、夏期六度何時も委細に万事を調べ置き候ひし  
 も途中の石室などは年々解雪のために、破壊致され候ため、今回登  
 岳にも猶ほ見極め困難を感じ候次第に候へば、寒中に攀登を試みら  
 るゝならば、先づ其年の夏に登山せられ置く事必要に存し候、  
 先は大凡右の如くに御座候、猶ほ其他の準備の如きは沈思黙考の結

果、何なりとも細心注意あらん事を切望致候、猶ほ瀧ヶ原の古老佐  
 藤與平治と申す人に、諸事相談致し候へば、喜んで周旋の勞を取り  
 呉るゝべく候、この人は野中君越年の折にも、萬事世話したる由に  
 聞及候、又山上の摸樣等は、中畑村の勝又熊吉、齋藤鶴吉兩人に尋  
 ね候へば、明白と存じ申候、  
 借今更に申上くる迄も無之候へ共、物には自ら順序有之、梯子なく  
 して階上に歩を移しがたぐ、翼なくしては天空を飛ぶに任せず候へ  
 ば、濫りに暴虎憑河底の勇を出し、無謀の輕舉に出づるは、決して  
 好み不申候、先年春一月、日原鐘乳洞口前に於て、積雪中に横死を  
 遂げし尋中生徒の如き、其志は賞揚するに足り候へ共、其方法の無  
 謀にして其注意の疎略なる誠に氣の毒千萬に存じ候、寒中の登岳は  
 滿目一新、夏期とは悉く異り居り候代り、其準備とても細密に計ら



されは不測の災害も有之可くと存じ候、  
 余は徒りに空文虚談に學生諸氏が、冬期春季の休業中を送らるゝを  
 轉じて平素養成されし体力と氣魂とを趣味あるこの山に試みられ、  
 各自處世上の一助となされ度く、併せて冒險の本意をも明にせられ  
 度く、併せて更に幾多の方面より、寒中の富士山を世に照會せらる  
 りならば、更に幾多の野中君を、この日本に生ずるに至る可くと存  
 候、

# 石槌山紀行

澱 水 子

余幼にして登攀を好み春夏の休杖を山の嵯峨たる絶頂に曳く茲に年あり愛宕、金剛、葛城、

六甲、筑波、箱根、妙義の如き皆既に足跡を止む去年八月一友と大和山上嶽に遊び役小角  
 の遺跡を踏み今年四月會々那須に遊び導者を従へ雪を踏み茶臼嶽に登り噴煙の猛烈豪壯  
 なるを見今年八月山陽に遊び足を四國に轉し石槌山に登る茲に紀行の一片を掲げんとす  
 廿三日、午前三時、宿屋の老母に起されて種々の準備を整へて、新居郡  
 大保木村を出づ、行くと凡三町、一危橋を渡り、山路に掛る、行くこと少  
 許、路一岐となる、石碑あり、右石鎚山と刻す右に進み、河に沿ふて行く  
 と凡里餘、石段を下り、再び危橋に會す、既に渡るべきに非ず、河流奔  
 激、碧を滿へ雪を飛ばす、徒歩と雖又渡るべからず、友人高きに登り、  
 呼んで渡るべきを謂ふ、即ち河濱に出れば、二本の材を以て巖石の間  
 に架す、是を渡るに、轟々百雷の如く、岩面皆滑にして、稍もすれば倒れ  
 んとす、二人相求めて渡り、遂に對岸に達し、石垣をよちて路に出ず、  
 夫より又杉森の中を行く、道暗ふして咫尺を辨せず、加之濃霧面を撲



らて、寒氣全身に徹す、只遙に谿水の聲を聞く而已、行くと又半里弱、三たび河濱に出ず、河幅狭くして、徒歩渡る可し、時に東天紅を浮べ、山蟬漸く喧騒、四隣明に辨すべし。道を急ぐ、坂路一里、峻峻無比、二人心氣疲れて殆んど堪へず。時に湧泉を得て僅かに杖によりて登る、山は礫石路に横はり、一進半退の有様なり。漸く黒川の村落を、頭上の山腹に眺め、稍勢を得て相勵まし登る、然れども、峻峻彌加はりて、容易に達するを得ず、切りに休息を貪り、六時半黒川村に到る、村犬に吠へられ、杖を揮へとも勢敵すべからず。終に一農家に入る、家には老夫婦と、外に老婦二人、小兒三人あり、一杯の茶を乞ふて、老人と案内の相談をなす。談忽ち決して、四十錢を約し、荷物を持たしめ、残物は家に預け、草鞋を腰に結び、只手帳、鉛筆、地圖、鐵槌、杖の外一品をも携へず。既にし

ず、只途中、二行者堂ある而已、一は堂邊に鐘を吊し、登山信者の寄進人名を刻す。一堂は稍大にして、眺望よく、伊豫沖の碧鏡を瞰下し、嶋嶼よく指点すべし。夫より更に登れば、礫石散亂、險惡甚しく、樹木の横臥するもの實に多し。峻一層を加へ、流汗玉の如く、十歩に休み、廿歩に水を求めつつ、遂に禾草シヨウソウの地に達し、九時十分常ツヨウ住ジュウに着す、地は黒川より三里、石鎚遙拜所のある處、石鎚神社社務所の大なる堂あり。是より絶頂は尙三里を除すと云ふ、實は二里に過ぎず、社務所に入りて、飯を食ひ茶を乞ふ、神官、山伏、下男の三人あり。神官は、大阪の鶏肉屋の息なり、と甚だ面白き男なり。山伏は髪を蓄へ、顔色黄青なる、一風變りたる五十位の男なり。食事を終らんとする時六人の行者に會し、相共に登らんと約す、遂に九人の同勢を得て出發す、社前の遙拜所に到る是より、絶頂を拜すべし。實に一朶の雲もな



三十四  
 く、近來稀なる晴天なり。行者の曰く、此山大抵九時以後は、雲の掛らざるなし、と我行何ぞ幸なる、昨夕小松にありて夕立に會するや、其山頂は全く黒雲に鎖され、雷鳴實に凄しく、二人其不幸を恨みしも今日此快晴に會す、眞に是天の賜なり、二人大に喜ぶ。其頂數箇の尖頭は、巍然として、深紫色を湛へ、神威儼然たり。案内の曰く、東方の三角なる峯頂は天狗嶽なり、其西の最高なるは御本山なりと。有名なる鎖は、三段となりて直下する様、實に壯觀の極なり。既にして二三の寫生をなし、登り初む、是より泥道多し、六人の行者、急に南無阿彌陀を大呼す、或は「アマイダ」と呼ぶが如し、余等思はず吹出す。行者建脚實に飛ぶが如し、余等諸國の險を跋む久し、未だ人後に立たざるを自負す、彼等の登る實に猿猴の如く、中間に狭まりし余等、其苦しき實に堪へず。彼等石鎚山云々の歌を大呼し、毫も疲勞の色を

見ず、中々緩む様なければ、案内に耳語し一樹に息ひ、六人を遠く六人去つて其影を止めず、二人茫然たり、漸く汗を拭ひ登る、坂路益急にして氣息奄々たり。是より樹木の路に蟠れるもの多く、是を潜り、此を越えて進む。偶余脚を樹木に強打す、是冥罰ならんと、南無阿彌陀を初むるも可笑し。漸く禪定森山に達す、峰は山頂より凡そ一里の下にあり、荒神を祭る祠あり。今や時々傷者を出す故に、鎖を絶ちて登るを禁ず、夫より少許、一梯を下り、更に左して登ると五町、願れば、禪定森山は、樹木鬱蒼として深綠色を帯ぶ。尙登ると數町。鐵響を聞く、導者曰く、行者既に鎖に達せり。と即ち苦を堪へて登り、一鳥居の側に達す、一の鎖に掛る。一の鎖は長さ十七尋と稱す、一節一尺五寸位なり、是を登り、又休息して、數町の岩徑を歩みて、二の鎖に到る。是は卅五尋なりと稱す。其險一の鎖に倍す、夫より凡そ一



時間、削立せる岩角、疎なる熊笹の間を登り、遂に三の鎖に達す。茲にも小祠あり、是より願れば、瓶ヶ森は其圓頂を半空に出し、雲霧漸く谿間より昇る、即ち三人大に歩を急ぐ。三の鎖は、山中第一の難所にして、七十五尋半と稱す、實に直立に板を立たるが如く、仰げば青空の内、白雲の狂馳する様、俯して數千仞の深谷、全く雲霧の鎖づる所を見、足自ら震ひ、手爲めに振て、膚粟を生じ目眩せんとす、一度鎖の中絶せんか、赤坂城々攻の二の舞を演せんかと思ひ、只眞直に登り、十一時五十分、鎖の將に終らんとする時、頭上に聲あり、即ち絶頂なり。頂は、巖岨々として鋸齒の如く、尖頭は疊十四五疊を布くべし。頂に一銅祠を安ず、高三尺、長四尺位なり、神體なく、只玉蜀黍一把を備へたる而已。既に六人連の内、五人は地上に座し、一人古參の者、合掌念佛して、珠數に米を附着せしめ五人に與ふ、五人是を推

戴ける様、實に面白し。是より、水を求めんとて、南方へ一町程下る、水は岩窟の内にあり、柄杓を付す、清冷舌を斷つゝの想あり。三人漸く力を得て、再び頂に還る、頂の眺望は、西に本山に連れる馬の背越を以て、伊豫峯に連り、更に南方三角標ある堂ヶ森山、夫より土佐矢筈山に連るもの、其包圍せる溪谷は、而河川上源なり。東は天狗嶽、數十町の内は獨聳し、岩燕飛揚し、望むべくして攀づべからず、夫より蜿蜒相走つて、目の及ぶ處空際と相摩せる處皆山なり。唯阿波劍山の雲中に没せるは、遺憾の極なり。北方は禪定森を初め、足下に筈立せる山々を望む而已。頂は海拔七千七百八十八尺、關西第一の高山なり。今や白雲漸々上騰し、或は龍虎の相争ふが如く、忽ち打ては霧を生じ、猛風一陣、全山皆鳴り、百雷の如き響を起し、散しては陽光炎熱、目爲めに眩せんとす。寸時万態、實に塵地の者に非ず、以て豪氣を養ふ



に足る也、

十二時、天益清く、炎熱直射、流汗玉の如し。然りと雖、朔風時に溪間より起り來つて、氣益清爽たり。山は只岩々の間、矮少の樹木ある而已。十二時十分、絶頂最高の巖を欠き、紀念として二三の寫生を土産として山を降る。元の三鎖を下り、黒川に到り、案内の家に飯して元の三危橋を過ぎ、五時五十分、大保木村に着し、宿賃を拂ひ、急いで數箇の峠を下る。日既に没し、森愈暗し、二人詩吟放歌に虚勢を張り、提燈を求めて急ぐ。鴨川に到れば、田舎芝居の爲め、船橋の番人なく、渡賃の助かりしを喜び、渡つて甘酒數杯を傾け、遂に西條近き處にて道を失ひ、十時半西條海岸の宿に投す。此日歩行十九時半、凡そ十六里を行く、里人曰く氷見より頂上迄は、往復十八里半なりと。十一時に寢に入る。

### 須らく不遇の山川を遊歴せよ

茗 溪 漁 隱

草堂人に接すれば、武人來り酒漢來り、劍客來り詩人來り債鬼來る、適々都門の黄塵を避けて函山塩溪に遊べば、其闢反て京地に倍するあるを見る、皎潔の士は久しく俗縁の地に止る可からざるを如何せん、あゝ遊も亦難い哉

男兒須養拔山倒海之氣、丈夫須遊名山大川之間、と善い哉々々、然も當今の書生皆軟弱、天吹と沙上の月明に調べ、葡萄の美酒を山泉の寐覺に飲み、佳人と談じ稗史と親しむ如きもの、天下を擧げて皆然り、噫かくの如くんば遂に一人の能く足を深山幽谷に入れ、世に不遇の山川を訪ふものなきに至らんか、いでや舊記と見聞とに依りて、一二東



京附近に於ける山水の勝を報せんかな、

(一) 玉川沿岸並に秩父地方

百草モクサに於ける高尾山に於ける、皆稍や風光に富む、然れども未だ青梅よりして玉川沿岸を溯るの快味あるに若かず、全地より二里餘にして萬年橋あり、左すれば即ち御嶽山なり、風景太だ佳、七代の瀧、大嶽山の曉霞頗る賞するに足る、此處より三里にして氷川村あり、溪山漸く深くして景象自ら清幽なり、此地より溪流は二分して一は日原川といひ、白雲山の麓に漲り、一は玉川の源となる、村は此溪流の三叉角上に位するを以て、溪山の奇勝自ら備はる、右日原川に沿ふて上らんか、三里の間遙遠として廻り途ニラダに日原村に至る、此處を去る半里餘にして日原の鐘乳洞あり、崑崙意外に大、以て深究するの價值あり、充分の準備と勇氣とあらば、單獨猛進洞中の十二羅漢に見參するも亦一興たり、

り、(委しくは本社發行の春燕秋鴻記に記しあり) 進んで仙元峠を越へ秩父大宮郷に到らんか、下影森に橋立寺崑崙あり(日本風景論に出づ)これ又一顧の値あり、或は山徑樵路を蹈んで武甲山に登り、彩霞淡く濃く溪底を閉づる趣を見、或は二子山に攀ちて天地參差の變景に驚くも妙ならむ、書家は山川の奇勝を探りて、其神秘を筆にす可く、地質家は鐵槌を振りて正に此岩石を研究す可く、人類學者は又以て此地に於ける遺跡を探見するに足る可し、こゝより左して大瀧に出で三峯山に登臨せよ、路險峻ならずと雖ども五十二町馳け足も妙ならん、乞食は嚴禁と雖も、書生落語家皆社殿に御厄介を許す、泊料任意應接懇篤酒あり肴あり、上戸は百杯を傾くるも猶其料を取ることなく、下戸は大草餅に腹鼓を打つも亦一興なり(委しくは春燕秋鴻に出づ)こゝより南の方山脊を攀ち雲取山に登り見よ、雲霧脚下に起り黒雲常に相呑吐



するの奇觀あり、是れ山名の起りし所以ならじ、然らざれば大瀧より中津川に沿ひ、一條の草徑を縫ふて溯り見よ、或は溪底を歩み或は山腰を行く、土俗四十八瀬涉りといふも、溪水を左右に越ゆると豈之のみに止らんや、時ならぬ鶯の聲は淵底に嚶々春滴ると怪まれ、宛然桃源の雅景なり、更に進めば幽溪更に造化の波瀾を究め、炭焼き小屋の烟さへ見ず、幽中更に幽なるを覺ゆ、中津川村はこの山家の僻邑人家僅かに三十を出です、此處より西の方三國峠を渡りて信州梓山に出で更に甲の金峰山脊を越し、御嶽山に花崗岩系の偉觀を探るも妙ならん、然らざれば大瀧村より雁坂峠に、七里の無人境を歩み、峽中の釜川に入る可し、而して又前の日原村より猶玉川に沿ふて上らんか、一路崎嶇常に溪流と相離れど、山愈深くして溪愈邃、凡三里の間人烟全く絶え亂峰日を撐して老木天を掩し嘗て陽光を見ず、而も河内村には小

鑛泉の湧出するあり、地僻に樓構の見るべきなしと雖ども、香魚を炙りて濁酒を傾け醉郷に入る、又快なりとす、脚下數十尋の處多摩の清流百折、激して瀑となり停して、淵となる、溪身奇石怪岩亂立、決して函山早川の流れの如く、小溪にして白紛臭さの比にあらず、景色幽絶轉々其凄絶と思ふ、更に深林幽洞無人の境を進み、丹波山村に至れば、其人其地塵俗を隔つる遠さの想あり、此處より進んで水晶山に登るも可、市の瀬に玉川の水源を究むるも可、然らざれば大菩薩峠を越して、甲に入るも可ならんか、地僻にして亂山峨々、車馬通するなき所、即ち書生の以て旅行をなすべくして、貴紳の履跡を印するなきの地處たり、甲州別街道秩父山中の如きは、寧ろ溪山の爲めに幸ならんかし、

(二) 武州の別天地(數馬村)

曾て道心和尙と五日市より、西の方秋川の長流を究めんとして果さず



ありしが、端なくも一二探險者の報道に依りて、武甲の境に接するこの山系中に、一奇境別天地ありしを明かにしたり、今聊か其行程と一般風俗を摘載し置き、併せて勇健なる諸君の實地に就きて踏査せられんことを希ふものなり、

武州西多摩郡五日市より西三里にして檜原村あり、戸數漸く數十をいす、探險者は此村に於て草鞋の用意すべし、一足五六錢位なり、食料鐘詰の如きは宜しく東京より調達し行く可し、奇境數馬村はこゝより凡そ七里程なりと雖とも、其間人跡全く絶え樵徑とても分明ならず、只榛檜蒼鬱たる處、藓苔石滑かなる邊を、西に進み南秋川と北秋川中間の山脊馬脊の如き邊を渡り行き、絶頂に出で、西に降り藤臺を傳ふて谷底に赴けば、即ち武の奇境數馬村の在る處なり、といふ、

(一)住居 斯る山間なれば、固より平地の在る可き筈なく、小屋は

危げなる断崖の上、或は幽谷の下に建てられ、窓より細々と立ち昇る煙の、梢に棚曳く状、滿目肅條さながら、炭焚き小屋を見るに異ならず、戸障子なければ草にて編みし苞を垂れて風雨を凌ぐのみ、

(二)衣服 先づ雑巾を縫ひ合せたるものと見れば確かなり嘗て一回も洗濯したることなければ、其臭氣云はん方なし、臥するに夜具もなく苞を被りて横臥するのみ、

(三)食物 米麥の類は夢にも拜むことならず、然らば如何なるものを平素の食物となしつゝあるかと言へば、三度の食は干したる唐麥ヒヤがたり芋、干栗等を或は煮或は焼きて常食とす、醬油もなければ味噌もなく、砂糖もなければ鹽もなし、只水にて煮たものを破鍋より摘むのみ、青大蛇、川魚を生きたながら食すといへり、

(四)職業 自ら勞するの事を知らず、只天與の幸福に安逸を食るの



み、又衣服は如何にして求めしかといへば、村内共有の山葵畑少しくあり、是を五日市へ持ち行き必需品と交易しての結果にてあるなり、

(五)男女、何れか男何れか女一見更に判然せず、骨格衣服毫も異ならず、只女は長髪にして巻き居る相違のみ、

(六)結婚、此部落のみ都て血族結婚なれば、次第に人口の蕃殖を見ず、暗愚者を以て充され、果ては盲啞の輩を多出するに至る可し、

(七)言語、一種の土蠻語なり、然れ共年に數度山中を出づるを以て、稍や日常語を解するもの、如し、

(八)年齢、太古の如き民、関として世の便を聞かざるもの、山中暦日なしとは正にこの部落の事なり、自己の年齢を知るもの絶てなく、名前さへ知らざるもの多しとは沙汰の限りなり、東京がぢぢやら、

こゝが日本やら試に吞氣の連中と申す可し、恐るゝものは、獸にあらす、火にあらす、巡查なりといへば、威めしき洋服姿の装束より、尻端折の浴衣の方、探見の都合宜からんか、猶途中の山道には蛇類の夥しと聞けば、杖傘の類を携帯するを可とす護身用の短劍等の如きは、之を用ゐざるを反て安全とす、猛獸の居るに非ず、只山中淳朴の民俗を知らんするにあれば、是等の戎器を持つは、彼等に疑念を抱かしむる因たればなり、鎌倉大磯に亡國的の人民に接するよりは、暑を此奇境に避けて、前代未聞の事實を探る亦一大快事に非ずや、余は茲に猶は甲州に於ける武陵桃源を諸君に報せんと欲するなり、

(三) 鳳凰山中の一部落、

鳳凰山は甲斐國北巨摩郡に在り、海を抜く事凡そ八千尺、山岳重疊の間に聳ゆるもの、釜無川に沿ひ、右岸圓野村の左より、コム川の溪谷



に下り、西南に登り御坐石を經、圓野村より五里山の東麓に達す、此處より登ると二里許り、山中に三戸の家族あり、五器曳と稱し轆轤にて椀器の木地を製するを業となす、暮春雪消へて暖氣徐に面を拂ひ、溪水潺湲の聲ある頃より、夏秋の頃は折々里に出て、製する所の木地を米麥に換へて世を送れり、此徒は一切社會の交通を絶つが故に、言語も通常職業に關する注文等の外は通ずる事難しといへり、彼等の郷貫は紀伊丹波信濃其他二三州の深山にして、本家とも唱ふ可きもの全國に五家計りあり、其祖先は材料多き山を求めて茲に移住したるもの故、本家とは極めて稀に往來するも、固より世外の徒にして家族も何程あるやを知らず、實際戸籍に編入しある者は在來一定の山に住するもののみ、故に今之を綿密に調査せば一家族百或は數十口なるべし、左に實地踏査せし人の談話に依り其異風を略述せん、

嫁娶の如きは木曾熊野白根等の山々に於て本家の照會を以てする例にして、男自ら女の方に至りて迎へ來り、小屋に入り花嫁の土産として齎す所の糯米を以て、新夫婦か之を餅に製し家族又は近山の同類を招待するなり、家に入り父母親戚に見ゆるに至りて、穿ち來りし草履の鼻緒を斬り之を川に流して、復び歸らざるを示すの習ひなり、宗教もなければ曆日も知らず、財産としては二箇の銅斧鉞等の器械の外、自製の器物と衣服布圍あるのみなり、其交易し得たる淺黄木綿の如きは、實に彼等が大禮服ともいふ品なり、風俗は窄袖に短袴を穿ち藤蓆を以て帽を作り、女子はヤシヤの實を以て齒を染むるの外、殆んど男子との區別を見ず、椀實にて味噌を製し、五倍子にて酢を作り、アケビの實にて油を搾るを知るといへば、數馬村の部落よりは、稍や進化の域に達せるとは見るへし云々と、山中の人寸點の塵氣なく、泉石の



勝又観るに足るものありといへば、前者と兵に探見の價値あるを信ずるものなり、

(四)富士登山に就きて

富士山の妙景は、遠望と雲と月とに在り、朝暾の如き雲を得されば、寧ろ平凡にして賞揚するの價あり、而して其美觀を知らんと欲すれば、少なくとも一兩日山上に宿泊の覺悟なきんば不可なり、

- 一、月夜登山、十六夜の月を脊にして、六根清淨を唱へて登る頗る可、風雨さへあらざれば單身夜行すと雖とも毫末の危険なし、剛力の如きは紳士の御連れ合ひ之を携ふるの必要なし、草鞋食物の如き之を肩にして登るを厭ふの輩は、始より登らざるの勝れるに如かず、
- 二、頂上宿泊の快味

雲煙變幻の妙は頂上を以て最とす、大空寂靜の妙も亦此處にあり、影

富士(富士反映)も日出日没の際頂上の西側に立たば分明に認め得べし、誠に壯觀無比、親不知子不知の難道、大澤の深谷、觀音嶽の水蒸氣噴出皆一顧の値あり、其他淺間神社野中測候所の如き又言を要せず、

三、登山用意 携帯すべき品々は

- 一、刺子足袋、(満山石なれば底の強き程可、)
- 二、フランネルシャツ、(感冒の患少なし)
- 一、水筒、鐘詰、煙草、酒類、
- 一、耐風マツチ、實効散、寶丹、ひよみ一二三の類
- 一、草鞋、(町にて丈夫なるを用意す可し、)
- 一、馬、剛力、温袍(宿屋に相談す可し)
- 一、笠、蓑、(山は風あれば決して用ゆるの必要なし)



一、泊料、一合目三十錢一合目毎に一錢五厘を増し頂上六十錢中食十五錢乃至廿錢

二、路順、東京より短時間を以てすれば御殿場より中畑新道を登る可し閑靜の地に宿泊を欲せば同停車場を距る十町餘舊御殿場に到り求めよ

金聖嘆曰ふ天下險能生妙、非天下妙能生險也、險故妙、險絶故妙絶、不險不能妙、不險絶不能妙絶、と世人須らく天下の妙絶を求む可し、往きて水の窮る處に到り、坐して雲雨起り電雷の襲ふを見る、豈快ならずや、而して妙絶の奇勝は、實に未だ世に顯はれず遇はざるの山川たり、嗚呼一代の人豪は舉て吾が新日本の健兒に聚るもの、請ふ往て雪深くして處を知らずの邊を探れや、不遇の山水亦諸君を持つ、久しからん也

# 雪の中津川

(秩父紀行一節)

## 三 簑 笠

名士を訪はずして古墳を訪ひ車馬を驅り名勝に遊ばずして短笥の向ふ所天險を冒し寒村僻地に遊ぶは三坊の旅行の面白しとする所なれば此行第一の目的は中津川探險にあるなり斯くて胸もつふる程の大雨に清き夢を破られたるは午前三時頃なりき今日の行程如何あるべきかと少しは雄心壯腸の阻喪せざるにはあられと簑笠の手前も耻づかしく脚絆に對しても面目なければ互に氣を勵して其の道程を合宿のものに問へば皆驚きたる面地にて斯かる酔興の行の愚なるを論じ三峯山近邊の樵夫等も過分の利益あるにあらざれば恐懼至るなきこと郵便脚夫が非常の高給にて二三日に一回通ふこと等まで問ひもせぬに三坊を都人



士とあざけり險難を冒すこと能はざるかの如く言ふも腹立しければ是皆衷情より出づる言にして唯三坊の暴虎馮河の行を制する婆心なるを以て唯だ有難しとのみ答へ更に強て其の險易を問はず其の如何に行くべきかを問へば彼等も三坊の如何に制するも止まり難さを知り地圖を畫がきて其の誤なき様教へ呉れたるは山間朴民の常事なりとは云へ其の親切さ何となく頼もしき心地せらる

三峯山に參詣し中津川に至らんには道路二條あり一は中津川の溪流を渉るものにして四十八瀬の渡と謂ふ蓋し四十八度河を越らざる可らざるを以てなり但し道路と稱すべき程のものはなくして怪岩奇石の狼籍たる上を渡り行くものにして唯だ頼るべきは泥鞋の跡のみなりと云ふ一は十文字峠を越ゆるものなり十文字峠は信武兩州の間に跨る高七千尺以上の峠にして上下八里ありと云ふ三坊は四十八瀬の渡こそ面白か

## 雲 耶 山 耶

## 雪 の 中 津 川

らんと思ひしが前夜來の大雨にて川水の嵩みたるを危み十文字峠を越すと定めぬ三峯山祠の常として拳頭大の握飯二箇宛を貰ひ桃太郎も宜しくと云ふ出立にて各之を腰にまとひ雨具の用意甲斐なくしく出て立つやがて雨こやみになれば白雲深く鎖して一色平に敷き只だ三三の喬嶽のみ朶々僅に髻頂を擡げ耳に聞ゆるもの例の梵唄の響と遙に水流の涼々たるとのみ霞を喫し雲に乗る仙人豈に我等を去る遠からんやなどと言ひつゝ降るをもく登山の心盤上に有益なるは斯く渺茫たる空際一物の目をさへざるなき天空に淨遊し塵汚世界を去る遠き時にあるか嗚呼此の際誰か天涯無限宇宙の大を知り狹隘壓制の惡むべきを知覺せざるものあらんや誰か胸宇を宏恢し意志を高邁ならしめ妬心争氣偏情邪念を去らざるものあらんや此の間油然藹然胸間に湧き出づるもの之れやがて人間本來の面目にあらざるなきか言ふ勿れ一時の發作のみ



と一時の發作即ち進歩の一段ならずや之を以てペンゲルも嘗て曰へり  
山は地の高所にして天に近きが故に最も聖き事業をなすに適せりと十  
戒の大訓が人類に授けられしはシナイ半嶋ムーサ山嶺にてありしなり  
佛教數千年の基を開きしはヒマラヤの南の靈鷲山嶺にあらすや近くは  
我國に於ても高僧名知識の難行苦行する所大寺巨刹神社佛閣の安置せ  
らるゝ所多くは人跡を去る大山高峯にわらずや之等の現象を以て之を  
推論すれば登山の功豈少々とすべけんや

十文字峠、白雲の中を過ぎ溪流の淙々たるを聞き降ること一里程にし  
て湖水あり濁流混々滔々岩に激し岸を打つ見るも目覺ましき程なり丸  
木橋を渡り又一里程を距て、椽本村あり村は十文字峠の下にあり茶屋  
に入り先づ例の大きな握飯を食ひ草鞋は中津川にはなさとの事なれ  
ば各二足づゝを求め更に道の誤りなきや如何を尋ね左に別かるゝ道の

中津川道にして真直に行けば信州に出づべく其の道程上下八里なるこ  
とも知り幾多の好奇心にかられて振衣飄然草徑を踏み登ること十餘町  
にして後程を顧みれば林阜塙落村邑廬舍脚下にあり遠く三峰山を望め  
ば白雲の中に隠顯し宛然一箇の好パノラマを見るの觀あり尙ほ深山一  
路羊腸長とも云べき山鳥の尾の長々しき路を登れば大谷を眼下に見下  
すあり之れ雁坂峠とによりなせる大谷にして樹木鬱々たり溪流あり潺  
々として流る其の壯觀遠く地獄谷に勝ること萬々なり三坊嘆賞措かず  
竊に人の知るなきを恨む尙ほ此の絶景を眺めつゝ登ると一里餘にして  
積雪既に深く道途頗る艱なり愈々進みて身は愈々高く愈々高くして雪  
愈々深く股を没するに至る既に二里程と思ふ所に至れども左に曲るべ  
き道なし時はまだ二時頃なれど層雲日を閉ぢ込めて四顧濛冥唯だ新し  
き氷靴の跡と猪兎等の足跡とは其の道なるを示せるのみにして滿目白



燈々鳥歌ひ獸和せず、萬籟寂寥恰も暗憎たる陰府に落ち入りたるが如  
 し三坊今は仙元時の事思ひ出し復た斯かる活劇を演ずるとなきやを疑  
 ひ相見て苦笑すされど斯くてある可にあらざれば各々隼目鷹眼各々道  
 を求めたるも中々あるべき様にも見ゆす七寸生を先鋒とし突天生を殿  
 將として又進む突天生空腹の餘り雪中に躊躇し辨當を開く然れども澤  
 庵梅干は恰も邪苦戒生の持つ所なりしを以て塩氣なしの冷飯咽に下る  
 べくもあらず悲鳴して「澤庵くれー」と云ふ蘇子の洞蕭にはあらざれど  
 其の聲鳴々然として泣くが如く訴ふるが如く地下の蚯蚓を笑はしめ樹  
 上の猿公をして抱腹せしめしならん邪苦戒生もさる者「澤庵くれー」を  
 「待てー」と聞きひがめ「たい早くこいー」と云ふ然かも突天生來らざる  
 也七寸邪苦戒兩生暫く待つ間に突天生のこゝろと來る少く怒色ありそ  
 は邪苦戒生の答ふるに禮を以てせざりしによるなるべし時しも日は山

蔭に沈みて谷間の方より暮れそめ冷風一陣颯と吹き來りて雪ばらばら  
 と墜ち來れば肌粟を生じ三坊とも青菜に鹽と萎れたり嗚呼天時地利皆  
 非なるに人の和をも失ふてはと各圭角を去れば又何時しか望の月のま  
 んまるとなりて同一鉢の三坊と也ぬ壯夫の思ひ立つ矢の一筋は岩をも  
 通はす爲しあれば此の道一筋を突切れば明日は信州にも出づべければ  
 なわーに安心すべしよし雪深くして通行し難く進退谷まる場合に至る  
 とも雪見にこるふ所までもと云へばつまりは雪中の野宿も風流にて面  
 白からんと少しはやけになりて理屈をつくれれば何にか何にやら分らず  
 に賛成くどうち進む尙半里程と思ふ頃はひ左に曲るべき道様の者あ  
 りて新しき彼の氷靴の跡は其れに向へり標札はなきやと雪を掘り見れ  
 ば左中津川道の四字を書せり痛快くど七寸生が怒鳴れば二子之に和  
 し聲空山に響き松聲に和し爽快云ふ可らず先づ函谷關は通り抜けたれ



ば成陽殿上秦孤を擒にするは目前にありなご、つふやきつゝ、只管中津川に向ふ山は北面なるを以て雪の積ると前より甚だしく顛轉雪達摩となるに數次尙ほ十二三丁降りたるにいつしか邪苦戒生の革囊の口開きで最も力と頼みたる磁針を落したるには流石の三坊も呆然たると暫く也き之より道甚だ狭く兩脚を並ふると能はざる程にして加ふるに雪凍りて滑脱甚だし而して一方は險崖絶壁千仞一方は高山峨々嗚呼一たび歩を失し谷底に墜落せんか最早之れ人界の者にあらざる也、よ退く其良策わらじ進むべし進むべしと或る時は前者携ふる所の劔を抜き雪を排し道を作り或る時は一人樹上に他を枝を以て引き上る等危険なると能く筆紙の盡すへきにわらず兎角する間に邪苦戒生足を踏みはづし倒に崖下に墜落し辛ふじて大木の支ふる所となりて別に怪我なかりしか望外の幸福也き突天七寸は邪苦戒生の谷底より登り來るを待ち受

け共に進みたれど危険さ言ふばかりならねば三人共に四つばひになりて犬猫の如くなりしも後より考ふればいとたかしき限りなり今は其の如何に危険なりしやは言はざるも只だ中津川の獵夫の其の日始めて山開きして尙ほ人の通行するには少し早しと云ひしと、山中の人と雖も氷靴を穿たざれば歩行し難き難所なりしと云ひしことを以て此のくだくしき記事を畧さんとす斯かる道二里半にて少しく雪なき所に出づ之れ即ち十文字峠連山の半腹也時既に鳥飛ぶを倦む頃にて暮色蒼然たり地圖を開きて何れの方向に至るべきやを定めんと欲したれ共磁針なし何ぞ東西を辨せん百計盡き萬事休すまよ山宿水泊は此の行始めより期する所也雪のなきこそ幸小高き所の樹下石上綠草を薦とせんのみと足に任せて前方を見わたす程の山に突進すれば意外偶然にも中津川の葦屋村舎を認むるを得たり時に思はず萬歳の聲三坊の口より一



齊に出でしも其の如何に狂喜せしかを證するに足らんか之より道は一  
 瀉千里にて絶叫して走り降る險峻急にして一步を誤らば不測の禍を  
 被るべしと云へと其壯快の情は三坊をして奔馬の如くならしめたるな  
 り異様の風にて終に山を下り中津川の清流を渡り村に至れば何者だ何  
 處より來たと村人一齊に私語す他の驚駭の數次なるに伴ひ予等のスコ  
 トクは層一層を追ひて進めり斯くて豪家佐島氏の東道により農家に入  
 る道途の險なりしを話し又村の風俗等を聞きつゝやがて頭を枕に寓せ  
 一身を褥に委ぬれば我早や我を支へず話も空吹く風となれり  
 中津川村 中津川村は實に武陵桃源也前後左右皆連綿たる青巒にして  
 四方至る所四里以上の峠を越ざれば人家に出づると能はざるなり其の  
 山巒の秀麗なる其の泉流の清冽なる其の境界の隱栖なる居民の醇樸に  
 して篤實なる既に浮世の風にあらざる也此の村は近來東都新紙の傳ふ

る所によれば明治十二三年頃始めて戸籍に入りたりと云へ共予等の村  
 人にたゝす所によれば既に數百年前に見地ありたりと云へば豊臣氏時  
 代より人の知る所ありしならん抑此の村は壽永の昔世は荊棘と亂れて  
 赤ねさす日のいと暗く源平兩氏鹿を中原に争ひ遂に赤旗振はず榮華の  
 夢も烟の如く消ぬ果てゝ恨を西海の烟波に残せし平氏の落武者佐嶋源  
 吾入道の逃れ來り當時此處に住居(戸數二戸)したる土民を従へ開きた  
 る所なりと云ふ今の佐嶋氏は即ち其の源吾入道の子孫なりと云ふ四面  
 の山嶺物に富み嘗て平賀源内の探掘せし鐵鑛あり其の他銅金坑等あり  
 と云ふ兎に角金石坑者にして若し此の處に來らんか淹留數日を思はし  
 むべし  
 雁掛峠 翌朝潺々として瀨を往く水聲に驚かされ目を覺ませば朝暉東  
 方に開く茫茫たる曉色の裡昨來りし十文字峠の險所を見渡せば恍然と



して夢の如き感ありき幾度か村人に謝し山を踏へ川を渡り所謂平賀源内の鐵坑なる者を見雁掛峠に登らんとす道雁掛川に沿ふて登る然れども道と稱すべき程のものならずして或は藤蔭により或は岩を攀ぢなどして辛ふじて行くべき程のものなりやがて頂上に至り野栗澤に向ふて降る道神流川に沿ふ兩岸天斧を以て削りたるが如き嵯峨たる岩石聳へ溪流其の下を流る自然の妙景色の美實に有り難き眺めなり到る所の水或は絶壁の間に懸りて立ち或は竹樹の間に臥して流れ或は深淵油を流したるが如く或は瀬を走り白沫を飛ばすが如し且つ流れ別れて又支流に合ふ水の變化の甚だしきはやがて其の川の美妙をなすものありとなれば此の水流の如き蓋し日原川鬼怒川の上流と兄たり難く弟たり難く關東屈指の奇川ならんか野栗澤を經新羽に着す

# 清風臥談

不可知山莊主人

綠陰清泉の勝なき陋居は塵外の清味を擲すへくもわらず況時と金とに縁なき衆生に於てをや即ち脛を曲げて枕となし一睡の天地に俯仰を恣トシチヤコシチヤまゝにす覺の來れば頓知奇今知己夢裡の談笑忘れ難きものあり會遊の山川を記さずして其笑柄を録するもの或は時に消閑の考案あるならんやを思へばなり

(一) フランシス、エー、バナザア

明治廿六年の事なりき湘南に海光を賞して悠遊の上句金なしでの富主詣ではと相談忽ち一決して飛び出せし存氣者三人漸く頂上をすませば懐中合せて僅か二頁文しかなき有様如何はせんと睡を居りしに上より



驅け下りて來し異人さん一名さて急場に思案は御座らぬとて珍分漢の口眞似手眞似無錢旅行のいはれを話し大磯までの御供がしたやと申せしに此先生中々大度胸まわく御話は後程寛々致す可しと三合目に山中の遠景を水彩畫に仕上る始末へ、ア此奴英國の畫家だなど思ひしも大野原に植物は野生菓實の彼是、はては秋草の學名から何までの説明と來たから夫では異國のキグネリヤかと籤から棒の者も起りし矢先さ御殿場龜屋にて晚餐を食ふ可しとの事ビールにオムレット急に腹の虫がありがたがりせめても御名前をさかんとどの事名刺の交換を爲して打ち見れば名題の通りバアザア先生其内に行きから枯木に雀の紋といふ縞の羽織着物は上布と來たからあされたり煙草入烟管が金に赤銅の紋くづし足袋は白絹十紋三分揚枝に手拭益奇妙と感じたがさて日本語は漸く御早う姉さん位が關の山とうした事と聞き訊せば日本は來ぬ以前

より大の好きアノノルドやデラシイさんは私の朋友此衣服は長崎の知己が眺へ置き呉れたるもの斯く申す私は七月の廿八日香港より來り今日迄廿餘日の日本見物觀察はこの通りとあらゆる眼に止りしものはネケツチに水彩畫なり其から上等の汽車にて大磯へ御供瀧龍館へ御案内二三日経て東京は大學巡覽と來られたり三人の命この先生に助けられたれば何處の何といふ人ならむと尋ね廻りしに豈圖らんや英國はオックスホルド理科大學教授博士フランシス、エー、バアザア先生が博物學取調の爲め官費を以て世界一週の途上なりしならんとは猶は一八九四年英國ロンドンマラットマガゼインに日本の記事中趣味ある日本の學生と題して三吞が富士狂言の委細も記しありたり蓋し此先生が妙麗なる筆になりしもの世にはさてく面白き事もありしものかな

(二) 攝州丸



次の年の浦めなりき今の氣田製紙會社技師某君は其頃ポート熱心家として雷名遠近に隠れなく久しき以前より計畫せられし伊豆大島短艇遠航を實行せらるゝとの事なれば同志の集まるもの多かりしが準備其他の點に就きて余等と議論を異にし相摸洋はいつにても疊の様では御座らぬぞ暴虎憑河は馬鹿の骨頂とぬかしてこつちは先づ適當なる舟を得て東京灣の巡行を思ひ立ち近きより次第に遠きに及ぼさんと先づ總州八幡への好果に味占めて次は横濱より楠ヶ浦に至らんものと築地某氏所有のヨット(川上某後に此舟に乗じて神戸に航せしと聞く)を借用し威勢よく門出はしたりし者の品川第二臺場を去る四海漚許にして颶風に會ひ雨さへ降りて空合物凄く浪は起つ舟は進まず柁は傷む遂に三分の二浸水となり將に沈没の危き處を大阪商船の攝州丸よりの救助に依りて漸く一命を拾ひあげられ船長室にて其目的からかゝる天候を豫知

せざる危険より未だ足りない〜と叱られて三時間の講釋となり少しく海の靜まるを待ち教はりし針路を目當てに夜の一時歸着を得たりこれを知れては大きな顔も出來ずと黙して居たりしに誰やら斯く々々と吹聴したればいつしか大島連の耳に入りて中止になりたるを可笑しけれ、たゞ今も風雨の夜半思ひわはすは余等の一命を救ひ呉れたる攝州丸の船長は明治三十年の秋十月紀州沖近海に於て其船と共に行術不明となりし一事なり

### (三)鎌倉の自炊庵

去る二十六年の事なりき、都に居るが厭さに、同志の面々と鎌倉は阪の下に逃げ行きて、魚勘といふ人の持家借りて、男世帯の異風流は、國士の巢窟は此處で御座いなんぞ、青雲洞と名つけて暫らくの間は、空嘯いて威張りしが、遂には米菴に事欠き、四十日を最後に打死して、



都に舞ひ戻りしさて其折の洞約といふものを、

記

- 一、飯の黒こげに小言一切御無用のと、されど當番はよく注意
- 專一と心がく可し、近頃米價の暴騰を知らずや、
- 一、菜の良否につきて是非するを止む可し、男とはかゝる小事にふ
- つく言ふものにあらず、人間の食ふものを食へぬなどぬかすは、
- 不都合千萬なり、かゝる人あらば三十棒たゞの上、圓覺寺の僧
- 堂へ修業に入る可し、
- 一、魚類は日々買ふのみを以てすべからず、價廉なりと雖も、塵
- 積つて山をあすを知らざる吾等にてはあらざるべし、滑川由井が浦
- 曲に半日の漁をなして、以て晚餐の肴とせよ、
- 一、酒は飲まんと欲するものは飲む可し、但し半酔を程度となし、

決して各其分を越ゆるを許さず、單に酔へは即足るといふものは、  
向の家に濁酒のあるを教へん、酒代は洞の經費を以てせず、又三日  
酔は決して介抱をなさず、

- 一、來訪者は懇篤に待遇し、決して無禮疎畧ある可からず、されば
- とて自腹を切りて、山海の珍珠などの虚勢を張るは反て不可なり、
- 凡て酒肴の禮は禮に非すと知る可し、
- 一、朝は太陽の地平線に出で來らざる中に起床す可し、雨天曇天
- は夜に至るまで起きざるも妨げなし、讀書水浴晝寢は之を忘る可か
- らず、夜は随意就眠す可し、外泊は恣に爲すを許さず、
- 一、百姓は國の本なり、宜しく親愛す可し、今の所謂紳士は吾等の
- 敵なり、決して服従す可からず異人共類々出沒の由なれ共、彼等禮を
- 持して接し來れば喜んで之を迎ふ可し、せめては通辯の勞位取やり



て遠來の客を慰むべし、女子と小人は近く可からず、敬して之を遠くるに如かざるなり、

一、各人能く其分を守り、互に相親しみ、毀譽必ず俱に、苦樂必ず之を相分つ可し、青雲洞は國士の巢窟なるを忘る可からず、

破れ椀にかげ皿、つるなし鍋にふたなし櫃、今も時々笑談の種とは本れり、

(四)東海道の彌次道中、

或る年の暮なりき、試験も最早済みたれば人の忙がしとぬかす今際に、何れかへ旅立せんと一人が言ひ出せば、日頃塾にて野次平さんといはれし君の、それは妙なり、夫では即刻只今より立ち出づ可し、行先きは伊勢参り、道中は野次平の胸にありとの如何て御座るに皆々合点じや〜と餅つさ錢をまきあげるやら、古本を賣るやらの騒ぎ最

中藝長の恩賜と胡蝶どの、小説の賞金が來て大景氣となり、五人男の行列となり、さて其次に控へしはの假聲と化けて、牛は牛づれのノツサ〜、東海道を下にく〜と歩み出しぬ、

餘りに騒ぎ歩みし罰は直ぐ様、一人が藤澤で財布を落し、一人が大磯にて眼鏡と包みを置き忘れ、これでは車の方がよかつたの泣言、三日目が函根の御關所から沼津とまりは情けなき歩み方なり、富士川で赤鬼といふ男橋番の男と喧嘩し、べら棒め錢なんかだすもんけ〜、こら、こら、見ねでも江戸の子だ〜、神田の御兄い様だ、べら棒め、と言ひし、に馬鹿野郎と番人の仕返に業湧かし、衣服ぬぎすてさんふと寒中の水泳見事拔手横伸に番人の眼驚かし橋錢の段は出さで濟みしが、赤鬼先生其夜より感冒といふ始末、三十九度といふ發熱に、不取敢實効散の持合せを頓々服といふ次第、幸と藥の効能にて漸次に恢復し來り



しか、實は一文惜しみの百損といふ筋となりて、流石の赤鬼先生三日の程は頭上からぬ有様なりき

府中は通る濱松は通る、岡崎あたりよりそろ財布かコレラに罹り、名古屋にて餘程重体といふ筋、この繁華の土地に十錢の泊料とは情けなき有様、終りか毛布を賣るやら、時計を賣るやら五人男も計つきて、罌丸は上がつたり、伊勢は太神宮様の御詣りどころか、漸く四日市より下等二割引といふ大安賣にて船に飛び込み、相模洋で小間物店中に、泰然と他人の辨當まで喰ひ込み、腹ふくらして横濱に上りし時は正に年の改りて正月の七日と云に、旅にありし身は何か何やら譯分らずも可笑しく、夫から一文なしの都上り、五十三驛の長唄端唄も間が抜けて歸り來れば、太神宮様の御守は々々どあちらからも、こちらからも尋ねられ、落したといへず、今更行かないもまづく、コレラも下手なら、何とも

いへず、遂に化の皮が現はれて、新年の餘興談となりしとも、今は昔の若い時なり、

(五)二百八十文が論より證據

今は數年の昔、或年の冬休み、世は新年と浮きたちて、最早休日の命數も短くなりし一夜、日頃新しき仲間の山莊に集りて、如何に鬼面共の來りしものよ、梁山泊ならば、差當り某殿は、魯智深の役なんど、戲言いふて、餅腹話の末に、青面虎と名乗れる一人、如何に各々、今の書生は虚勢ばかりの奴等なり、爲さでもよきに荒繩の帯しめる奴、態と帽子破りて樽かつぐ人のみ多けれ、一人として眞の大勇、眞の豪者はある事なし、見渡す限りの面々共、幸ひこゝに餘錢の二百八十文もちて、江の島詣りして、白菊殿の碑前に一首奉りて來る勇氣はありやと、己れ日頃の虚勇は隠して言ひけるに、山嵐と申す氣早男、ハ、ハ



、、大杖持ちて何處かと思へば、百里は愚か三十里ばかりの往返とは情けなき題の出し方、よし／＼幸ひ未だ五日の休みあれば、余れ即刻より参り申して、青面虎殿の膽玉挫かんと、遂に二百八十文と握飯二十、雨傘一本、尻端折りての下駄天走り、折からの霰を、何にこんなもの、雪ならば更によしなんぞ笑ひつゝ出で行きたるぞ可笑き、さて其證據には六郷橋の欄干、鶴見ステーション曲り路の電柱、程ヶ谷境木の神社、戸塚手前川上村の白木小橋、藤澤遊行阪左手石段神社の鳥居、江の島稚子ヶ淵石碑へ、山嵐來るの貼札すべしの約束しけるに、其翌々日の朝一葉のハガキは山莊へ飛び込みぬ、

霰や雪や雪や氷、冷たひ氷も金鐵の如き体には屁でもなし、飛んで／＼飛びぬいて、橋も神社も電柱も、貼札は確に行ひ、只今無事白菊殿碑前へ参拜を終へて、歸りかへにて候、

重たかもし兵糧にて、いつも頗る満腹、景色の好かりしは鈴ヶ森雪夜の明月、馬鹿見たは六郷往返の橋賃一錢六厘、面白かりしは藤澤山本橋下の徒足涉り、嗚呼精神一到何事不成、この苦樂を知らず顔、只々寒いなんていふは、ペケ々々サランパン、大に不可、

さては野郎最早歸り來るに相違なしといへば、青面虎獸庵ふさぎ出して、出掛の約束遂行すれば五十倍の償金情けなしと泣き面の其夕、オイ歸つたと山嵐の元氣よき聲に、皆々消印は藤澤なれどあやしき行者なりあんと冷笑へば、何とでもいへ、俯仰天地に愧ぢすと山嵐威張り、遂には獸庵の後檢分となり、二百八十文旅行確に嵐先生の手柄となりて、次の日曜が慰勞會の償金馳走で、大團圓、徳をした山公損をした虎公、今も腹を抱へる話の一つとなりぬ、



握飯旅行

(其一節)

江湖山人(聞書)

頃は七月初め、貧囊をおんで博多に着した頃、お腹は空く喉は乾く、そこで、昌福寺とか呼べる寺刹を見込んで、一宿のなさを願ふたところが、なか／＼諾さない。出家は人を助くるのが肝要と御經の文句にあるのを知らぬ、經讀みの經知らずとは氣の毒な坊様だ、と冷かすぞ、ナンノ、書生の五十人や百人に宿をかすのは造作もないが、宿賃をいくら置いて行くか。と云ふから、今では極樂の沙汰も金次第と見ゆる、とても駄目とあきらめて、次に縣の令公岩村氏の門を叩いて、一宿を申込んだが、主人が病氣だとかなんとかで承知してくれない。いまく／＼しい、いづれも客な先生達だ。と思ひきつて夜行と決心して、

九時頃に田代といふところに着いた。さて路行く人をつかまへて、此近在に大百姓はないかと。尋ねると。別に大百姓もありませんが、俠客か一人居るとの返答に、べたりと躍りあがり、所や番地も生聞のまゝ、大急ぎにかけ出した、二三町行いて尋ねると。ハア親方の家ですか、それは長榮藏さんだ、その所から二三町山の手へ行けばわかる。と教へてくれた、有難いと二三町行つて聞くと五六町先だといふ、又其先で聞くと七八町先だといふ。だん／＼山の中へ誘引きこまる、様な氣持かするので、こやつ狐狸めが化かすのではないか、とも考へたが、まゝよ行くところまで行けとづん／＼と進んだ、かれこれ十町も進んで尋ねると、今度は、七八町ばかり後の方だといはれてさなきだに空いた腹が溜らなくなつて來た、しかし仕方なさに、ぼつ／＼後戻りする、路傍に立派な家がある。長榮藏といふのは……。と尋ねる語



についで。それは私方下……。と答へた。大喜びに喜んで、さて親方は面會を頼むと、生憎や留守だとの返事、さりとてこゝ一寸も退かば腹の虫に申譯なし、大談判を試みて宿を假せ、と追つたが頑として許さぬ。よろしい然らば飯と茶を呉れる、と請求したら、子分等は怪現な顔をしあがら、やつとこゝろを持つて来てくれた、腹減りまされに十二碗を平び、茶をのみお菓子まで詰め込んだので、元氣も恢復し十五六里は大丈夫と思はれたので、暇をつけて久留米へ向けて膝栗毛の頭を立てなほした、真夜中の月影を我一人の身に浴びつゝ、ソツサ〜と大道を潤歩する愉快さ、天地は我物の様な氣がして面白くてなまちない。久留米へ着いたのは夜の二時頃であつた、月も西山に落ちて道路もよく知れないから久留米の市街をブラリ〜と散歩して居ると、巡査にかまつて。全体君は何者だとの尋問に、正直にありのままを白

状した、それから眠くていかなから何卒覺に泊めて呉れ。と頼んだらいかない。と一言に断られた。併し留置場といふところがあるといふとですが、そこへ一ツ泊めていたいく譯にいきますまいか。といふと査公は笑ひながら、そこは罪人を入れる所です。と答へた。ナニ一晚位は罪人と同居でも我慢しますから……。と切に頼んだが無駄であつた、査公も氣の毒と思ふたか、やがて言葉を和げていふには。併し君も草臥れたでしやう、是から十二三町山の方に一ツの稻荷祠がある、そこで一休み明方を待つたらいいでしやう、尤もそこへは時々怪しいものが出没する、といふ評判もあるですが、氣を着けたら何のともありません。と教へてくれた。怪しいもの、出沒？、エーまゝよ、身に着いたものは、金八十錢と日記帳と尺八と握太のスタッキと衣服下駄及び命だ、まさか命に障りもあるまい、行くべし〜。と決心して、



查公の云ふがまに、右に折れ左にまがり、終に稻荷の祠に達した見れば三四百年も前に建立されたかとも覺しき古祠にて、いかにも怪物でも棲んで居りさうなところだやがて大戸をこじわけ、蠟燭の折片に點火してそろり／＼と中へ入り込んだが、何だか薄氣味がわるい思ひきつて眠らんとしたが、非常な蚊でなか／＼寝着かれない、とかくするうちに流石に疲れが出で来るので、そろ／＼と眠りかけたと思ふと、ガタ／＼と怪しき足音のするので、不意に眠がさめて来た、見れば燭火は消えて眞暗な中に、朦朧として影の様なものが見ゆる。さては怪物め、生れてから初めて見参したぞ、と魂を丹田に据え、身動きもせず、睨みつめ居ると、彼奴も入口に立つて何だか此方を睨み返して居るらしい、かくして少時を過ぐすと、怪物はそろ／＼と自分の方につて来る様子。おのれ何程のところがあらん、近寄り来らば飛び付いて荒

膽をひしぎくれんと息を殺して待ちかゝるとは知るや知らずや、はや我と二三尺のところまで近づきたると見へ、スウ／＼と呻る聲微かに聞こえて、頻りに何か嗅ぎでもする様子なり、今はこれまでなりと、ヤット一聲列ネ起きさま、頭と覺しきところを、ガン、と一ツくらはせ、鐵脚を飛ばせて脛のあたりを蹴りつけたるに、ワーツと一聲をこぼれたり、べたりといさなり組み伏せ、拳骨かためて張り飛ばせば。ア、イタ、、、、と、泣き音を出し、御免なさい／＼と叫ぶにぞ、扱は妖怪でもなかりけりだ。全体貴様は何ものだ、何しにこゝへ来たのだ。と尋ねるひまに燐寸を擦りて消いた蠟燭を點し、つく／＼其風体を見る、と自分より一尺四五寸も丈短き小僧である。小僧は驚いた目玉をパチンリ、、、させながら。私はじき向ひの鐵瓶屋の小僧ですが、蕩藥をして二三日前から、主人に叱られて逐ひ出され、仕方なしに每晚此所に來



て泊るのです、貴君何國から御出でなさいましたか。とぬかした、實に大膽な不都合極まる生意氣小僧である、そこで。貴様の云ふところが實際なら見逃がすが、一時の逃げ口上だと、家宅侵入兼安眠妨害の罪を以て踏み殺すぞ。と嚇してくれたら。い、わ、虚偽ではありませぬ。と陳するので、先づ同席を許して、扱て年齢を問へは十七だといふ。そんな少々な姿で蕩樂が面白いか。とさくと、小僧め得意然として、舞臺が少さくても蕩樂は又格別です。と喋りおまけに。私が女に好かれる理由があるのです、私は舞臺が上手なのです。といふから。それなら一つ躍つて見せろ。と云ふと、笑ひながら承知しない、たつて勤めると。躍り度いが耻かしから躍りませぬ。とぬかす。エー面倒臭い勝手にしる。といふと、一つ躍りませうか。とやがて少々な聲で、一掛け二掛けとか鄙猥な歌をうたいながら、手拭を捲いたも開いたりして、

一生懸命に踊りだした、小一時間も躍つて汗をたらして居ながら、中々止めさうもないので、止める一の號令を下して。貴様はなか／＼の美少年だが、目的は何をやる積りだ。と尋ねたら、眞面目な面。私は俳優になる目的です。と云ふた、かれこれ問答する中に、蚊が非常に攻撃してたまらるので、小僧を拉して散歩に出かけた、すると一人の飴湯屋が居るのを見て、小僧め呼びとめて自己に御馳走をした、袖ふり合ふも多少の縁と理窟をつけて、二三杯何とも云はずに飲んだ、それから久留米の市街にさしかゝると、向から一人の查公が來ると、小僧め驚いて隠れてしまった、查公は前に世話になつたのと同じ人でうか／＼とやつて來て、今逃げたのは誰か、貴君は堂宮へ休まなかつたのか、と問ふので、逃げたのは稻荷祠で初對面の少年である、と蚊が喰ふてたまらぬので散歩に出來たのである、とこと／＼と委細を話した、查公はうな



づいて、その小僧は怪しい奴ですから、注意なさい、と云いつゝ立去つた、すると小僧め、どこから再び現れて、巡査が何と云ふたかと尋ねた。貴様を怪しい奴だ、と云ふたと話したら、大變に立腹して、巡査に談判すると息捲いた、おれは、まアそんなに怒るな、と慰めてなほぶら／＼散歩するうちに夜も全く明けた、小僧は親切に本道まで送つてくれたので、厚く禮をのべて別れたが、二度と出會うとかあるか知らん。面白い風變りの奴であつたが、今は何をして居るやら、風變りの小僧と別れて、日一日鐵脚を驅りて其夕暮に百貫といふところに着いた、所の名は百貫だけれと懷中には八貫しか無い貧乏旅、まゝよ身代ありたけさらけ出して、上等旅籠へとまり込み、胃の虫を喜はせてやらう、と其町の中で尤も上等らしき宿屋を尋ねた、入口に立はたかつて、突然に上等室に泊めて呉れる、と怒鳴りつけたら、下婢

はおれの風婆を頭から足の先まで見て居つたか、やがて。こゝは上等客ばかりですから……、木賃宿は十町はかり行くとありますよ。と鼻のささてあしらつた、おれは生れてから木賃宿に泊まつたとはない、上等旅籠が一番すきな性分だから泊めてくれる、宿料はいくらだ。と尋ねても、只だ高い／＼と云ふばかりで冷笑つて居る。さうまはおれを乞食上りの厄介物と見くびつたな。といさまけば當然といふ口ぶりだ、だから止めなさい……木賃宿を教へてあげるに。といふから失敬な奴だとは思ふたか、ここぞ地獄の沙汰とやらだ、とぼけつとから十錢ばかり抓み出して與へたら、下婢は呆れた面を澎らして怪訝な容子をして居たが、澎れたのがは／＼と破れだして。上等は七十錢ですよ、とぬかした、宜しい一晚頼むと應揚にかまへて、泥足のまづか／＼と上りかけたら、下婢め驚いて洗湯を持って来て足を洗ふてく



れるといふ始末だ。おれは足を洗ふて貰ふた事はない、いつでも泥足のまゝにじり上つて泊まつてばかりいたから、といふと。御戯談ばかり、始めから乞食らしい姿体ではあるが、どことなう高貴さうな人だと思ふてゐましたが、あるほど……。なんぞ、十錢には高すぎるお世辭を並べたてやがる。

二階にゐがつて上等室へ大胡座かいてあたりを見まはすと、中々奇麗な部屋で大鏡や香水や櫛などまで供へてある、まかし随分腹がへつて居るから、そんなものはどをでもよい、飯が早く喰いたいののでべつに催促したあげく、二時間ばかりあつてやつとこゝろでウント御馳走を運んで来た、いざと口舌を揮つて喰ひはじめ、八碗喰ふたら膳のおかずは一片を留めない、香の物をドツサリ持てこい。と追加を命じたら、下婢の奴驚いて下に行つたか、やがて大皿に一抔もつて来た、得

意の儘をハリツカせて遠慮もなく飯を平らげ、今一碗と出せば。湯ですか、どの口かす、飯が椀杯と規則もありはすまい、飯だ……。と一碗又二碗また、くひまに平げる。モー御湯になさい毒ですよ、と云からなんの今朝から何も喰はないから當りまへだ。今日一日分と明日一日分と都合二日分にしてはまた足らない。と云いつ、茶碗を出せば。毒になりますよとい、ながら盛つてだす。それから更に茶碗を出すと、今度は半分位しか盛らないから、一口にバクリと平らげて、もを飯は盡きたのか。と問ふと。なに下に行けばあります、此飯桶は二升三合入りますのですよ。と云いつ、底を傾ひけて見せるから。馬鹿云ふな、いくらおれが大食だとして二升三合飯か喰へるものか。と始めて箸を投じて湯を二三ばい呑んだが、まことに久振での飽食に、天下はみなわれのものになつた氣持であつた。



九十  
 腹の皮が突つ張れば目の皮がたるむ、といふ原則どほり横に寐ころんで、悠然と想を無何有郷に馳する折しも、間の襖をそろりと開いて、中年はかりの紳士らしき人が首を差し出した、咄失敬なつと思ふまに彼方は言葉を和けて。失敬ですが貴君はどこから御出でになりましたか……とこへ御出でになりますのですか。と尋ねるから。東京から來ましたのです、行く先ですか……熊本へ行くのです。と答へると、紳士は笑ひながら。君の大食には下婢も閉口したですな、先に下で御降り。の書生さんが十六椀喰べましたよ、と云ふてましたが随分やりませすな、胃は悪くはなりませんか。といらない心配口をさくから少しはムツとせしが何でもない顔付さで。何ともないので、昨夜飴湯を二杯たべたぎりですから、まだ四五椀はいる餘地はあるです。と笑ひながら答へた、紳士はなるほど、随分冒險も宜いですが、後日の患がたて

九十  
 るといけませんよ、若い時は何とも思いませんが、空腹をしのんで旅行は身体の爲でないです、君の身体ではそんな事も障りますまいが、兎角ころばぬ先の杖ですからアハハハハ。と親切らしき口上なり、つら／＼紳士の風采を見るに、金時計に金縁眼鏡のところ、儘に紳士といふ通稱をかぶせる價值がある、年は三十前後で、東京言葉のところは儘に水道の水を飲んだともあるらしい、色のなま白のところを見れば、おれの舉動に驚いたのも無理はない。くだらぬ説法する折しも、細君らしい女が口を出して。まお御つかれでしやう、菓子も葡萄酒もありますから、此方へ御話しにいらつしやう、と云ふた、紳士は酔ふて居たらしい、ア、忘れて居た、來たまへ。と手をひいて坐敷へ入れるから、遠慮なく侵入して、たらふく御馳走になつて見ると、紳士が何だかわらさうに思はれた、孔子さまも小人見利解怒と云はれたが、おれも



その仲間かも知れない。と心で笑ひつゝ居ると、細君をかゝり、曉舌家である。貴君は御体格がそんなだからあんなにわがりなさるも無理はないです。これから鹿兒島へでも御出で、すか。などのべつに尋ね、はては、両親はあるか、兄弟姉妹伯父伯母祖父母の有無より、戸籍關のそれ役人さまのやうに、根堀り葉はりさくのが、いかにもうるさかつたが、一杯の葡萄酒一皿の美果の御馳走に免じて、とさまかくさま出放題に答へてやつた、紳士もさすがに、山の神の曉舌が氣耻かしくなつたと見へて、苦笑ひをして居つたが、細君は井戸端會議的の長廣舌を一轉して、自分の履歷をしゃべり出し、そろそろぼろの端でも引き出し、そうなる勢に、紳士は。こらよ、つまらぬことをいふなよ、と金縁の眼鏡越しに睨一睨すれがさすがの細君も、演説中止とした。われは飽食の上に酒氣も少し薄したれば、いままゝで夢心地にて聽いて

いたが、こゝで疲れたからを前置として、この面白き紳士夫婦の座を去り近來になき立派な絹布の夜具にくるまつて横になつたが、寝ころろは悪くなく翌朝目が覺めて見れば、太陽高くのぼりて、こら出掛けんか。と怒鳴つてござつた。八時半頃出發した、悠々として大道を濶歩しつゝ、熊本へとこゝろざした、別に何の面白きことなくして、午後零時半頃熊本市に到着したが、昨日こしらへた腹中も最早もてず、いさりとて無一文の身なればいかんとも詮なしとはいふものゝ、頼み甲斐ある友人のある嬉しさ、市原某氏の宅を尋ねて令弟某君に導かれ、いろく御馳走になつて、さて二三日逗留と決し、花岡山金峰山に登つたが、いづれもよい景色である、さて翌日のこと、市原氏の友人五名が阿蘇山へ登るとの壯舉を聞き、神裏の肉しきりにうごくを覺へて、市原氏の紹介にていよく



同行することになり、まことに愉快でたまらなかつた。(下略)

# 雨の夜

やまがっ

病後の保養慮りしゆゑかどかくに氣力なく、勉めんとして勉むるの勇氣なく、遊ばんとして遊ぶの勇氣なし、勉むともなく慮るともあらず只徒らに日を過して、試験もをへぬ、この病は只山水に依て醫するの外はあらじ、いざさらばわが親しき管笠蘭を友に、これびは玉川の上流を探らばや、と脚絆も流ひ、草鞋も求め、準備すでに整へるに、日々の雨天、軒端をつたふ玉水の音絶わすして休暇もはやあす一日をなりし六日の夜、常ならば蕭條たる此春雨の夜をたかしたる歌ふべきを

けふしも殊にその音のわびしさ、われは終にかの山地を訪ふ能はざるか、わがわが病をいかん、わがわが此の足をいかんと、壁を見れば、足袋、筒、笠、などの一まとりにかゝれるに塵の少しをきたるいよゝむひければ、せめての心やりにもとて、去夏漫遊の雜書とりだす、げにわれなからあさるゝかきぶり、されどさすが親しき足ふみしとて、とて見もてゆく肉、いつしか我魂は其當時に飛び、兩野の山川をさまよふ心地なきにあらず、いでこの雨の夜のつれづれに、おもひいつる一二をしるさばや。」

## 赤城大洞

八月五日なりき、師の君一友、と共に朝前橋を發す、管笠とさの行装初めてのことにていとれもはゆげなりしよ、笠に書とつひし同行三人の文字、人々いかにか見ゆらん、つまたと上りにゆくと四里、山路



に入る盛夏いと寒き、不動の瀧を見て峰に登りし時、濶然たる兩野の眺望、雲霧のひましく、利根渡良瀬の二大白流長布の如く茫々たる兩野の平原をうねりたるさまを見たる、いと異様なりしよ、地蔵が嶽の麓にて濃霧に包まれ、白雲の仙と化して大洞につきしは夕ぐれなりけむ、大沼の水静かにして黒檜駒が嶽の峩々たる峭壁斷雲に隠見するさまいとすさまじく、吹く風をいろにさむかりき。」

このあまけちつさわびしは夢なれや黒檜おろしのさむくもあまかな

あすは、この黒檜を北に越えて深谷に下り、幽の幽、寂の寂なる利根の荒村を訪ひて追貝に宿らばやなど、互に打かたらひつゝ眠りしが、結ぶ旅路の夢まよはして、夜すがらこきこきとなきし鳥の聲のいぶかしさにあかつき起きいで、師の君に問へば、あれこそ杜鵑なれと教へられき。」

戶外にいづるに、光微かなる朧月は冉冉として雲むさいづる駒が嶽の上にかゝりて、近き梢になく赤つぐの聲いとをかし。」

駒が嶽しげる梢に月おちてつぐの聲より夜はあけにけり

この日なりき、黒檜の頂上にて雲霧の奇を見て雲上の仙かと疑ひ、路もなき鶴林の險崖を北さしてたばつかなくもたどり下るに、ゆけどもく林はつさず、思ひ屈して磁石を見れば圖らざるさま東に向ひ居らんとす。」

急に左折し、北さして谷を越ゆること二三、漸く開けたる山頂に達したりしも、人里ある方はいづくかさらにわかず、樵夫の通ふみちやと求めたれども、見渡すかぎり只雲霧のみにてせん方もなし、わが衣は霧に全くぬれていと寒き上に、けさより難路、飢ゆると甚たしければ腰の辨當ひらきて勇氣づげんとしたりしを、師の君のこの山又山の奥に



迷ひておまつさへかく雲又雲にとどろく、我等、けふは野宿せんとし  
るべからずこの腰の一つの辨當、けふはおろかあすのかもとたのま  
はどもしる可らざるれや、など云ひ給ひし時こそいと心細かもしが。  
谷をこゆると尙幾度遂に一小徑を見出して上ると三里ばかり、ふと辨  
村につきたりし時のうれしさ、腰の飯たうべし時の甘味さ。」

追 貝

これより片品川の奇景を左に見つ、危橋を渡る事幾度百尺脚下の碧  
潭に魂を失ひしと幾度、絶壁をよぢ、断崖を下り、追貝につぎ、知人  
を訪ふに、水の爲め路は壊れ、ゆさかふ人もなきけふ此頃まして都の  
人のよくる來給ひしもの哉など云ふに、我等はいとうれしかりき。  
暮雲やうやう群峯をとさす頃なりき、その人いざ溪流の奇を案内せん  
じて先きに立ちてゆく、師の君及び一人の友は山になれたるをせせ

らばと立ちたるに、我れはつかれたれどやむなく後に従ひゆれば、け  
に溪流の面白さ、岩床の断崖をなせるに激する水、ほとばしる水烟、  
或は青碧あるの如く、あるは透白雪に似、其の奇、其の勝、他にまた  
類あるべしやはとおもへど、路險阻にしていと危く、さらでも飢餓つ  
かれたる身の唯ふら〜と空を歩む心地してどゆさける、今ねもふも  
あやうき限り、一步をわやまらばはたいかなりけむ。」

やがて高さ二丈餘巾三四寸ばかりの岩板の上をわたる、これはどあき  
れてたすしほほほに、人々はとくわたれり、左を見れば白く奔れる激  
波、右を望めば碧として底しれざる深淵、魂はとび氣は狂はんとせし  
も、さてあるべきにあらねば、意を決してふるふ〜岩にしがみつ、  
渡る、すさまじかりき。」

尙一つの絶景をとその人の云ふに、われ絶叫してあゝ飢ゑては絶景も



食一椀に過ぎずといへば、皆々笑ひつゝやがてその家に伴ふ、夕飯七椀、臥床に入りし時の心地よ、過ぎこし困苦ながら夢の如くなりしもたのしかりき。」

菅沼

東に岩頭の天を磨するは白根なりしか、峩々たる峻巒にとりまかる、周圍一里の小沼の畔に獵士「のづさん」なるものと共に、鮎焼き、味噌つけて食ひたりしも此時なりき、「のづさん」よく飲みよく語る、往時の劍道や、冬時の熊狩や、得々として語ると二時ばかりなるとさ、忽ち霹靂一聲とともに、怪しき哉黒雲蓬勃としてむらがり起り、千岳、万峯山雲俄に狂ひ瞬時にかわる天地の景趣、雲まひ雷をぞる恐ろしさありさまにひたばしりに走りてかの獵士の一つの家に下りたりき。」前山の峻嶺を雲うすく掩ひ、宛ら絹地に書ける黒書の大圖をみる心地

していとよましましかりしは此時なりしか、両山相窮するところ、懸流落つる畔、一列の簷つけたる人の露したゝる草叢をわけてゆく書中の人の一人とわれなりしも此時なりしか。」

二荒山

小川の僻村を立ちいで、さびしき山を過ぎ、雨野の境にいでたりしに九日なりけむ。」  
よと眼下遙かに小石の如き湖をみ、あれは湯湖にやなど語るふはど、前面火の柱の天につき入るが如きものあり驚さてよく見れば、これは二荒の絶壁の日に映じたるなりき、戦場が原にて仰ぎたるよりもいと高く、神々しくみわたたりしとのあやしきよ。

ちはやぶる神代のまゝの二荒山天そりたつすがたな、しも

大雨と大雷を侵して湯本にくだり、戦場が原に日蝕を見て日らすつ



く頃中禪寺湖畔につきたりしが、二荒登山連の大混雜意の外なりき。この夜よ、一枚の蒲團をぬてよくも眠りせず、頭いと重きに目を醒まし足をのばさんとすれば、傍の人のいと苦げにうめくにみればわれその人の胸けたるなり、こは誤てりと横にむけば、あな、わが目の前は一ツの脛こそ横はれ。

朝三日登山するに、一里も上りたらん頃提灯を焼きし時の心細さやみはあやなし二荒山、我につよくべきものなきに、あはれくかゝる旅行しくはだてさらんには、今しもあたゝかきわが家のふしきに眠り居らんを、なとれもひつゝけしもこの時なり。」

苦しき息を杖とともにつきてのぼりしに、あはれ頂上は雲海四面をどさして蓬々たる天風の寒さあるのみ、他の行者の如く信仰よりにもあらず、又、願事あるにもあらず、全く探景の爲めにのぼりしむが失望、

落膽、今もなほ夫をうらみ山靈をうらむ。」

庚申山

銅山の濁流を左に見て足尾の小瀧支局を過ぎ、庚申山途にかゝりしは四時過ぎなりけん、雨はふりにふりて見渡す前山に白雲立ちのぼるさま、こゝもまた心細かりしよ。山腹を帯の如くめぐる一縷の小徑にふるふ足をふみしめたりゆく、仰げば千仞の絶崖は高く雲を巻びて聳えたり、伏せば千仞の深谷は嶙峋としてけづるが如し、われは寂寥の感にうたれて、白雲の奇や、絶壁の奇や、長瀑の奇をみることもなく、師の君を促してはたすら路を急ぎ庚申の社につかんとするに、今なほ忘れず、百三丁のところより路を失し、ゆけどもく社はみえずして山は益深山幽谷に入るのみ、かかるは途に日はくれ、雷は吠へ、水聲、藤聲、草鞋も切れ腹もゆるたり、遂に溟下散滴。」



かゝる山奥に野宿もおそろし、さりとて足もつかれたり、いかゞすべ  
きと師の君と二人語りつゝたどるほゞ路ますく細くなりゆくのみな  
れば、遂に足尾よりの途中にてみし小舎に、よし、匍匐してなりとも  
歸らんと決してたばつかなくもとること二里、やうやく百三丁のと  
ころにきたりし時、ふと電光に庚申山右への木標を見出しつゝ、さきに  
何故見落しけん互に恨むほどに先づうれしく師の君をかけぬけて右  
折八九町遙かに社の燈火をみし時兩足俄に痛みいで、進みかねしこと  
今れもふもをかしきことなりけり。」

床に入り獨りゑみつゝ歌ふ。

夕やみに

しらぬ山路

なごいの中を

隠はたちまち

ふみまよひ

わけゆけば

おそひきて

雨ぞそほふる ひさささの  
燈火いづこ ひさのゆく  
うまやぢいづら 谷川は  
水の音たかし 山松は  
風の音はげし ゆきくれて  
さまよふわれを いかにせよとが、  
日はくれぬ人はかへりぬ山深くまよふかげ路にかみなりわたる。  
あらしふく夜はわびしきを旅衣山路ゆくなりやまはなくして、  
翌曉神官の我等がため祈る未來幸福の太鼓の音に夢を破られて起さ  
づれば、山又山の奥ふかみ、水聲、松聲、全くこの世のものにあらず。  
見渡す谷々白雲深く沈んで景趣うたゝ幽なり。」  
案内者をえて庚申山にのぼる、富士見岩の邊白雲濛々として富士を見  
ず、獅子岩天狗岩鬼の耳すりなどいふ處を過ぎて胎内くゞりにいたり  
かの入犬傳の現入を思ひ一角をおもひ馬鞆の虛大を今更にたれもひつゝ



ゆく、第三の石門より鐵梯をよぎ木棒を傳ひ鐵索にすがる所いと多し  
 それより大黒岩煙子岩鶴龍岩などさしも思はれぬを案内者の云ふがま  
 らにうちうなづきつゝ、馬琴の所謂危の危、險の險、目くるあき足むな  
 らくの天の岩橋を三とびに踏ぬ、一上二下遂に群峯脚下に朝するの奇  
 あるが、庚申最高所の峯に於ても、亦空しく雲海の噴を發し山壁のい  
 はしく我等に不仁なるをうちみて下るに、はや名物の雷はとどろきは  
 じめぬ。」  
 願みればこれすでに一年の昔語、昔として夢の如く、たもはるゝをか  
 しとよ。  
 春雨の音いとどしめやかにして燈火の火もくらうなりて、あはれとく  
 晴れよかしと願ひて窓をひらき、暗々たる大空、雲のたねまもな  
 し。

### 遠足の快樂

鐵 脚 道 人

さて小言を云ふわけではなけれど、さても今時の若い書生達の意氣地  
 なは、親譲りの立派な脛か二本あるにもかゝはらず、車にのりたがり  
 船に乗りたがり、新橋より上野淺草へまはるには、鐵道馬車に乗るべ  
 き事、を規則でもあるやうにふるまい、すこし寒き風が吹けば、ト  
 ンと遠足の二三町もすれば、ばかりくと身体の温まるのも御存知な  
 く、がまぐちの音がするに任せて、やれ蕎麥屋だの牛肉屋だのと、無  
 駄な金を費やしての横着沙汰、食モタレが澤山出來て、胃散本舗がさぞ  
 や繁昌するとならん、と他人のとながら無念でたまらず、そこで遠足  
 の快樂をのべたて、いさゝか江湖諸君の注意をひかんとす、握飯三



ツ四ツを腰にぶらさげ、渡船賃四五百文を蝦蟇口にさらけてみ、身輕  
 にいでたちて野外に飛び出せば、目に入り耳に聞こゆるもの一として  
 樂しからぬはなし、霜柱さくくど踏み碎きて、握太のステッキにて  
 路傍に結べる氷をたゞき破りつゝ、勢よく進むときは、寒氣というも  
 のは何處にあるやら知らぬ、と火燧をほしがる人達に尋ねたきは違  
 り。まして花さく春の野邊、氣さよき秋の山路遠足の快樂は筆にも口  
 にも述べがたし、  
 司馬遷といふ男は史記を書いて名高き人なるとは、誰しも知らぬもの  
 はなかるべし、史記の文章か雄大偉麗の壯觀を以て盈たされたるは、  
 司馬遷か名山や大水を跋渉して氣を養ひし結果である、と宋の蘇轍か  
 云ひし事もあり、ゴルドスミスが有名なる「行路難」の詩は歐洲を遍  
 歴せし間に種を得たるもの、山陽が詩賦も大概は西遊東遊の間になれ

り。一々かき立つれば際涯もなかるべけれど、古の人傑とも呼ばれた  
 る人達は、旅行は尤もつとめしものにて、而も現今の如く呑氣なる旅  
 にはあらで、随分さはどきとをやられたるなり、さあれ、我等の如く  
 まだ書生の境界にありて學課といへる重荷のあるものは、夏休課冬休  
 課または春期休課の外は思ひ切つた旅行も出來ず、是非なきことなれど  
 も、一週間に一日の日曜あり、たまには祭日もあり、都合よきときは  
 祭日と日曜がつづきて思ひ設けぬ命の洗濯する時もあるなり、かゝる  
 休課は朝寐を十分にさせん爲にあらすして、平日讀書の骨折をなぐさ  
 め、元氣を快復させんためなり、それにはさまざまの方法もあるべし  
 れども、まづ遠足は最もよきもの、一と數ふべし、其機能をあらまし  
 數へあぐれば、

第一、遠足は精神上的の愉快多し



廣庭に野球を試み、長江に短艇を漕ぐ等の運動は、健康なる身体と活潑なる精神を養ふに不足もなかるべけれど、遠足の有する利益は又格別のものあり、又誰人も行ひ得らるべき便利あり、ぶら／＼と歩行するに随ひて、鳥の聲花の香、高き山低き森、千態万状をなして四圍にあらはれ、行くところに歓迎の意を表すべし、急がんとする時は勝手にいそぎ、そろ／＼と歩行せんとすれば、又己の欲するまゝなり、思ふがまゝに天然の好景を眺めて、高歌朗唱またドエラキ剣突を喰ふの煩なし、太郎作殿の茅屋を叩いて一杯の白湯を乞ひ、興茂平殿の椽側に腰を休めて蒸し芋の御馳走にあづかる。日あたりよき堤の芝生にははみこみ、秘蔵の握飯をかぢりながら、首をめぐらして野外の景色を眺むるときの快樂は、牛鍋をたぐいてナマヤゴブを怒鳴る輩の夢にも想はざるものなるべし。かくのごとく平和にして心地よく、しかも過

激ならず因循ならぬ運動が、健康上と精神上に及ぼす効力は、云ふだけがおろかなるべし、まして此遠足といふとは、二本の足さへあれば誰にでも出来ることにて、術といへば歩行といふより外になし、詩を吟じながらも、談話をしながらも、道理を考へながらも、焼芋をかぢりながらも、自由にできるものはただこの遠足あるのみ、

第二、遠足はさきほめて経済的なり

近郊の遠足には渡船賃の外は何もいらぬべし、或は四五百文の餘裕を保持せば、それを鬼に金棒とでもいふべく、堀立ての薩摩芋の三ツ四ツを買ふて、枯草の焚火にて焼くとも出来るべく、又は霞寶張のお婆様から、遊茶と植煎餅の振舞を受けらるべし、してまた、其あまらむらば、枝ぶりよき花の一二本を求めてかへるとも難からず、元より山川村落の風色に飽ぐととて、美味もほしからねば贅澤もたこせず、



終日身体を運動さし心氣をさはやかにして歸れば、飽末なる夜食も入珍の料理とも思はるゝなり。むかしある奇人あり。友人の誰彼に向ふて、明日の午飯に世に珍らしき御馳走すべければ、何とぞ来てくだされと申送りたり、招かれたる人々は大喜びにて朝飯も控へ目にして出掛けたるに、十一時すぎ十二時すぎても膳が出ず、一時たち二時も鳴りて腹の虫キユウくと、呻る頃にやつとのとにて出したるを見れば、麥飯に香の物のね茶漬なりけり、さあれ空腹の事とて其のうまさ限なく、いづれも十分にくらひたるに、主人は、けふの御馳走はこれまでに候、いかがです美味く候ひしか、と言ひたるに、坐中の人々は成程と感心したりといふ話あり。贅澤な根性は怠惰者の胸にやせる。休課の日に一室にころがり居れば、ろくな考の出るものにあらず。郊外に遠足すれば、自ら身体精神の修養とともに、質素の習慣を養ふこ

と請合なり、くだらぬ見世物を観るにも費用を要し、人工的のパノラマを観るにも財布の供給なかるへからず、しかして其得るところは何ものぞや、遠足して自然天成の大パノラマを觀、廣濶ある原野に新鮮の空氣を吸ふて、而かも甚だ節儉的なるかくのごとし、世の青年諸氏何ぞこれを以てかれに易へざるや

### 第二、遠足は實地の學問なり

日常讀むところの書籍に精しきのみか學問にはあらず、世間の萬事萬物はことごとく研究の材料となり學問の裨益となる、田畑の間を逍遙して蔬菜菽麥の生立つさまを見、古祠舊寺を訪ふて庭内の碑文を讀み壁間の扁額を眺むる等、遠足によりて得るところは甚だ多し、若し注意して郊外を求むれば、歴史上の事蹟も澤山あり、試に東京近傍の二三をあげれば、鴻の臺は里見氏が北條氏と決戦せしところにて僅に残



る城墟には、十五歳にていさぎよく戦死せし里見義廣の墳墓あり。矢口渡は新田義興が憤死せし舊蹟にして、神社いがめしく其墓を祀りつゝあり。入間川附近は北條上杉が有無の戦争せし古戦場にして、板橋の近在は昔し煉馬氏が兵をわけし土地にして且つ維新の際にも戦闘ありし地なり。其他行くところとして男兒の膽玉を肥やすに足る舊蹟數ふるに遑わらず、こはひとり東京のみならず、地方々々にも必ずあるべし。又歴史的の方面ならずして、地理、金石、動物、植物等より風土人情なども心掛しだいにて如何様にも學び得らるべく、一日の遠足百日の讀書にまさるゝともあるべし

またく澤山の利益もあれども、長談義は憚りあればこゝらで止めるべし、凡そ上の三條だけにても遠足の快樂は承知せられたるならん、疑ふ人あらば試に膝栗毛に一鞭加へてやめて見玉へ、道人が説法も成

程と感心せらるべし

### 貧乏旅行の七難

香 雲

先年七月四日の日、横濱の一天暗雲棚引て、星芒の旗色獨り鮮に、外夷をして遂に皇子の名を成さしめたる無念さに加へて、復讐の機拳振り下げられぬ當時の事情、何れも星中の腹遣せにもと、讀賣新聞を咬みして、鐵脚坊諸共此に本州横断探奇旅行と出掛けたり。かくて信濃の川、飛越の山、思ふが儘に荒れ廻りて、白山地獄谷の逆落し、湧き立つ硫烟を吞吐して、加州市瀨に下りし迄は、當時の同紙上に書き載せしが、其後の珍談歸途の七難は學事に逐はれて執筆の閑を得ず、今度こゝに記して江湖の一笑に資するべしと云ふ

白山の半腹暴風凄しく襲ひ來るに逢ひて、笠を奪はれ雨衣を剝がれ、



這々の体にて逃げ下りしは八月十七日のとなりき。是より先き吞雲故ありて、鐵脚坊に別れたれば、獨り破笠を傾けて越前福井を志し、山路を辿り行く程に、途を白山の支脈なる大長山赤鬼山の間なる間道に取りたることとて、馬蹄も立たぬ險道惡路、人家なきもの殆んど九里、食物を得ざるもの八時間、準備の鯉節食ひ盡して、山桃の苦汁に喉を濕し、辛く木賃宿を求めて梅干の菜に麥飯の茶漬是ぞ何よりの美味膏梁と、立るに八九杯を傾けたるはよけれど、代金八錢と聞ては囊中空乏を告げ來りたる吞雲坊、少々狼狽ふためきたり。さても福井より岐阜迄の流車賃を一圓三十錢と見積りて、吾が懐中既に一圓二十錢を餘すのみなれば、(岐阜には留置の爲換あり)如何に吞氣の吞雲もこれには少々閉口して、先づ無賃宿泊の方法を案する程に、辛く駐在所を求め出して巡查に同宿を請ひたるに、此處は我等の官邸なりとて情なく

断はられ、漸く村の區長殿の厄介に預りて、思ひ掛けなき優待を受け、これにて第一難は逃れたる。明れば八月十八日、福井市迄は猶七里あり、十九日の夜迄に是非東京へと目算して(急用あり)、途を急ぎて行く程に、さてはや流車賃も是らざることで、晝餐等は思ひも寄らず、されど饑腹さの苦し紛れに聊が助力を依頼するの心得にて、越前松岡町の警察署へと跳り込みぬ。何がさて風体の異様なるには、満室の警官(警官?)互に面を見合せ居りしが、如何に落魄したればとて、鷹は死すとも翅を摘まず、假令十日食はずとも高揚子する武士の覺悟は備へたる吞雲、(當國の名所質問に罷り出でたり)と許りにて、最初得意に新田義貞の事蹟等論辯し居たりしが、先何とはなく「全体福井より岐阜迄の流車賃何程なりしや」と打ち出したる。警官小首を傾けて「さればなり、大抵は二圓三十錢位



ならんか」と答ふれば、吞雲此處ぞと大に驚けるさまをして、「此は或  
や大事を仕出来したり、我は大に豫算を狂はしたり、確に一圓十錢位  
と思ひしものを」と繰り返しく唧ちたれば、警官もいたく氣の毒に  
や思ひけん、「されば何程の不足を來せしにや」と肩打ち響めて問ひ出  
でたり。吞雲此處ぞと、「なに三十錢許りなれど、旅路は心に任せぬと  
のみ多く、東京にては晩酌一杯を價せぬ端金も、是なくては東京にも  
歸れぬ今日の場合心中御推察下されよ」と許りにて、いと惘然ばく持  
ち掛けたり。警官、「なに其位のことならば如何様にも致して參らせん」  
と警官等と打語らふ様なりしが、やがて白銅六枚を携へ來りて、「是は  
寔に些少乍ら前途學費も御入用の御身、特には御旅行御苦難の程、御  
様子にて推察し參りすれば、我等一同寸志として呈上致したし、御返  
却等ありては却て迷惑致す次第枉て受納められよ」と言ひ出したる。

吞雲流石に之を貰ふの心なければ「なに一時借用致して歸京さへ出来  
れば、其れにて御厚情の程は充分にて、特には野羅苦羅壯士の聲に倣  
ふて合力を乞ひしとありては、學生の体面にも關する次第、唯岐阜迄  
拜借致さん」と詞を轉めて争ひたれど、警官中々聽き入れず、兎角空願  
にも堪兼ねたれば先づ警察署を辭し去りて、一旗亭に晝餐を認めつゝ、  
此に漸く第二難を逃れて心漸く落ち付きたり。  
さてもそれより福井迄三里許りの間は一目算に纏け足して、午後三時  
停車場へと馳せ付けたり。まづ賃錢は何程と打見やれば、此は亦何た  
る事ぞ、僅に一圓八錢と注せられぬ。吞雲大に得意となりて、今夜岐  
阜市に着するものならば金ははや自由なる可し、數日來山中の絶食  
（體節の外）身の瘠見ゆる程なれば一時に腹を肥すておくれと、食ふ  
も食ふ、飲むも飲む、囊中亦餘す所流車賃の外僅に二錢、時刻移りて



出發の時間來りたれば、岐阜迄の切符を買はんとせしは、今夜は米原  
 (北陸線と東海道線と合する所) 限りにて岐阜迄は明日の汽車ならでは  
 行かずと云はれたり。此に吞雲大に閉口せしも、後は野となれ山とな  
 れ、先づ米原迄の切符を購ひたり。さて米原に着きたるは其夜八時の  
 頃なりしが、明日の汽車は午前二時なれば、猶六時間の猶豫あり、白  
 山の谷間に野宿し、絶頂の室堂に假寝し、日に十五六里宛も走りしと  
 して、全身綿の如く疲れて、逆も立ち明かすとの出來べくもあらず。  
 さりとして琵琶湖畔の夏の夜となれば、蚊群の襲來甚しく、野宿の苦  
 みは猶更らならず、呼入る、宿屋の樓上羨し氣に打牌みて又々警察署  
 へと駈近みぬ。さて事情を物語りて宿泊料の借用を依頼せしに、警官  
 容易に信用せず、索性収調へ中々嚴重なり。聽て旅行券等を示す程に其  
 疑も漸く晴れたりと見え、鬚髯長く垂れたる警官は吞雲に向て言ふ、

「御苦難察し入る、若し御好とあらば警察署へ御一泊あれ、窮屈とあら  
 ば宿泊料差上げん御好次第ぞ」と云はれたり。吞雲此は亦面白きとな  
 りと思ひ、「警察へ泊りたると未だ一回もなければ、後學の爲め一泊の  
 榮を得たし」と頼みたれば、湯を沸かし足を洗はせられ、彼の鬚長さ  
 怖し氣なる巡查殿と臺灣の談等打聞きて、同宿の榮を得たりして亦  
 なく可笑かりけれ。此にて第三難も先づ逃れたり。  
 かくて翌朝午前二時頃呼び覺まされ、一警官諸共停車場へと馳せ付た  
 れば、汽車は今や發せんとする所、心の急ぐ儘に岐阜迄の切符早く買  
 りくれよと頼しに、吞雲の紙幣破れたりとして聞か入れず。さりして他  
 に持ち合せなしと云ひたれば、旅客が三十錢丈にて汽車に乗るもの  
 があるかと咎めらる。さりして書生の旅行歸途は斯様なものと打詫れ  
 ば、其者官線の權柄を振り回して容易に聞き入れず、問着數分汽車發



せんとする頃、旅行券の有難と警官の懇請とに依て、漸く切符を買ひ得たれば、先は是にて第四難をも切か抜け得たり。

かくて岐阜市に着くと等しく、郵便局へと馳せ付けて、留置き書止の有無を問ひしに、ありとのと故一先づ安心せり。やがて八時を待ち兼ねて爲換を受取らんと思ひしに、こは何事ぞ、局より局への通知なければ拂渡すと出来ずと云ふ。呑雲大に失望して是れ迄四難を逃れ來りしに、此にも斯る難儀ありけり。如何にしても今日(十九日)中には東京に着くとは出来ぬとよと、いたく其不幸を嘆して力を落したりしに漸く午前九時迄に其通知書着したればとて、先づ漸く此第五難をも逃れたがしが、次なる第六難は遂に逃るゝとを得ずして思はぬ難儀をぞ受たけりかくて爲換をも受取りたれば、大急ぎにて停車場に馳せ付け、今夜十時に着すべき筈なる東京行の切符を買はんと思ひしに、何

たる不幸を何たる悪運ぞ、十七日來の暴風雨(余が白山半腹にて逢ひしもの)にて瀛車不通となれり。今日中に東京に行くと思ひもよらずと云ふ。呑雲又々失望して、世路の難とてよもやは如くまじと思ひ乍ら、先づ行き得る丈けは行かんものと、觀念の臍を固めて瀛車に打乗る程に、其夜九時頃瀛車は箱根山中山北の停車場に止り、是より國府津迄六里の間不通なると知られたり。

此に東京の一商人にて伊豆入湯の不在中、其家火災に罹りたりとの電報に接せりとて色を失ひて歸京を急ぐ親子のものに會し、今夜是非國府津に夜行するならば同行しくれまじきやと頼まれたれば、足手纏ひと大に閉口したれども、呑雲の義心否みもやれず、其依頼に應じたれども、何がさて箱根山中のこととて、僅に險惡なる山路の外國府津に至るべき路もなしと聞くからに、かくてはかなはじと此に意を決して



驛長室に到り、鐵路歩行の許可を得たしとぞ申込みける。驛長大に閉口して、「されば公然と許可する譯に行かざれども君が隠に其禁を犯すを止むるの必要なし」とありたれば、吞雲大に喜びて前の二商人を伴ひつ、其夜午前二時頃漸く國府津に着きたりしが、數日來の不眠と種々の慘憺たる經營との爲め、身体大に疲れ果て、兎ても緩行の煩さに堪へねばせめて一思ひに驅足とは思ひしも道連ある身の夫れもならず、特に鐵橋等渡る折は吞雲器械体操の心得ある庇陰には飛鳥の如く跳渡れど、連れの商人は東京者の意氣地なく、匍匐ひて渡る其手緩さ、吞雲此上なく困却せりかくて、第六難は困難を以て凌ぎたれど、次なる第七難の愉快なるは亦七難中の壓巻なりき。かくて國府津に着きたるは午前二時の頃なるが、今宵こそ懷中温かなれば宿屋にとまると大成張と思ひしは亦抑の過り、汽車不通の爲め旅屋は悉く満員にて、何處に

行かすもすげなく断らるゝ腹立たしき、されど今宵許りは我が袋束の異様な爲めにてはなかりけり。さても世は儘ならぬもの哉、宿屋ある時は金なく、金ある時は宿屋なし、あはれ今宵も亦警察の厄介にもやなるとかど、しはしは進み行く程に、郵便局の徹夜して事務を取扱ひ居るものを見付けたり。餓たる者は食を撰まず、宿屋なき身の何とて家を撰むべき、先づ立ち寄りて其事情を物語り、枉て一宿を乞ひしかど、主人中々聞き入れず、「貴君の困難察せざるにあらねど、拙家とても御覽の如く郵便物滞滯の爲め徹夜して事務を執るの大混雑、氣の毒乍ら平に御免を被りたし」と云ふ。吞雲、「さりとては亦無情なり、混雑騒擾疲れたるの睡たさには何の障りか之有るべき」と頻りに言ひ争ひ居たりしに、一美髯の紳士事務所の方より出で來り、吞雲に向て「貴君の旅行地は何處なりや」と問ひ掛けたり。吞雲答て遠州より信州と



言未だ中ばならぬに『然らば〇〇新聞の吞雲坊なる可し、我は横濱郵便局書記〇〇なるが、今日郵便物處分の爲め此所に出張せり』とて吞雲に名刺を示し、さて家人に向て『此人ならば大丈夫なり、我れ保證すれば一宿の便を籍されよ』とありければ、鶴の一聲何かは遲疑せん、一家直に其命に走りて夜具に蚊帳とひしめき合ひ、今は得意の吞雲は錦帳羅床の中に泥足踐み延ばして、勞れたる身の氣樂さは騒も耳に入らず、久し振りにて快き一睡を買ひにけり。かくて第七難も先づ凌ぎたるが、明れば八月廿日の朝、一番列車を以て國府津を發し、午前九時無事新橋にぞ着きにける。勤さに吞雲の帝京を辭してより、旅にあるものこゝに三十五日、生死の間に入らせしもの又唯一再止らず、今や全く其目的を達し、鯨車筆を乗せて歸る、吞雲の特意思ふ可し。其新橋に下るや獨り君が代を三唱して、嬉し涙に暮れたりしが思へば

可笑しかりき。而して彼の最終一周日の苦心艱難は大に吞雲の健康を破り、在京數日にして赤痢病に罹り、大學病院の厄介となりしこと、亦時に取ての一興なりしか。

### 怒濤澎湃遠江灘の壯遊

遠 洋 漁 長

我が國四面海を環らし、同胞自ら稱して海國の民と云ふ。然れども海國民たるの實未だ恐く擧がらざるなり。一般國民海事思想に幼稚あるは、我が國舊來の國是が之をして然らしめたるものにして、亦敢て深く咎むべきに非ずと雖ども、明治聖代の健兒にして、猶は未だ海波の何物たるを知らざるものあるに至りては、吾人は實に國家の爲めに長



太息せざるを得ざるなり。彼の擾々たる白面文弱の徒は措て論せず、而も氣骨稜々たる吾黨の健兒にして、東京灣内房州通ひの汽船に色を失ひ、嘔吐眩暈殆んど人事を辨すること能はざるものあるに至りては、吾人亦謂ふに忍びざるなり。これ或は躰質の然らしむるものあり、或は幼時境遇の然らしむるものあるべしと雖ども、要するに怒濤澎湃の間に吾人が到底陸上にて夢想だに及ばざる、勇壯絶快なる境涯あるを知らず、従て海に遊ぶの念なく、海事に習はざるの致す所なり。漁長生幼にして海濱に生長し、海上の遊びを好むこと學を好むより甚だしく、毎年夏期歸省する毎に、海船に塔じて遠江灘に遊ぶ、勇壯絶快の状、身一たび之に臨まずんば想像だも及ぶ能はされども、今其一端を擧げて將來我が海國の國士たるべき江湖數萬の健兒に報せん。

我遠江灘たる東海上第一の險灘にして、東は伊豆の南角より西は志摩の麥崎に達する海上七十餘里の總稱なり。東には駿河灣あり、西には伊勢の海あり、而して直ちに彼の黒瀬川と稱する一大潮流の洗瀉を受くるを以て、海潮の透明無垢なること之れを掬すれば岩清水の如く、之を望めば蒼注として藍黑色を呈す、従て魚族頗る繁殖し風光も亦明媚なり。若し夫れ一天雲なくして風朗かなる時、一たび此海に航するや、滿目茫々として一碧萬頃遠山の峨眉波に浮んで豆陽の岬頭大灣を抱き、富嶽狀艶かにして諸嶺西に驚き、砂汀忽ち瀆名の大湖を呑む所の宛然一幅の絶畫なり。既にして順風船を送れば、滿帆風を孕んで、船の行くこと箭の如く、碧浪爲めに碎けて舟舷白玉を迸らしめ、軟風徐るに征衣を吹て意氣爲めに爽然たるものあり、或は夕陽既に二見が浦の西に没して西天紅を漲らし、紫光斜に豆陽の連峰に映せば、忽ちにし



て明月東海に跳り、金波船を掠めて冷風舷に宿るとき、亦酷暑の何物たるを知らざるに至る。然れども風伯一たび激して、其勢を逞くし、海神亦怒て其威を奮ふに至れば、名にしをば遠江灘、激浪天を嘗めて勢ひ山岳の崩るゝが如く、寄せ来る怒濤は宛もナイヤガラの大瀑布を幾つとなく重ねたるが如く、すさまじき響は轟々般々として天地を震動せしめ、陰雨暴降して疾風舷に怒號し、檣は折れ帆は飛び、大船巨船の援を求むべきものなく、日は既に暮れて咫尺辨せざるの時、我が船は既に我有に非ず我命は己に我が命に非ず、身は忽ちにして累卵の危さに處すると雖も、茫然自失、坐して死を待つべきに非ざれば、恐憂の情は變して剛勇の氣となり、各々死力を奮て日頃鍛へし我腕の續かん限り風濤と戦ひ、能く此風濤に勝つに至りて始めて生を天地の間に寓するを知る。是れ我遠江灘に於ける普通の光景にして、或は遠

く南洋に吹き流がさるゝことあり、或は激浪の爲めに其船を深く海底に揉み込まれ、全員を擧て魚腹に葬らるゝことあり、七十里の沿岸只難を避くべきは、下田及び鳥羽の兩港あるのみなれど、半途にして或は坐礁し或は顛覆の難を免れざることあり。故に此海に漁するもの一たび天候の豫察を誤らば預め此等の危険に遭遇することあるを期せざる可からず。此險を冒すの勇ありて始めて勇壯絶快なる漁場に臨む可きなり。

夫れ三尺の小竿を携へ、行て河畔に小魚を釣るも之れ閑人の以て無上の快樂とする所に非ずや。况んや一網羅し來れば捕獲數萬、巨口細鱗長尾豊目、潑々として目前に跳る、漁撈何事か愉快ならざらん。遠江灘に於ける漁業の方法數多ありと雖ども、就中夏期に於ける最も勇壯にして、單簡與みし易きものは松魚釣りなり。松魚の種屬は毎年初夏



の候より、億萬群をなし、彼の黒潮に従ふて近海に來る。然れども容易く海岸に近づかざるを以て、網を用ふるの時少く、多くは釣の法に依て之を捕獲するあり。松魚釣りに使用する漁舟は其構造頗る堅牢にして激浪に耐へ、輕快にして走行迅速なるを要し、乗組の人員は小さは七八人より大船は二三十人あり。此船に乗るものは鷄鳴籠裝して纜を解き、天明には已に海上數里を進まざるべからず。漁場の距離は時に同じからずと雖ども、大約十里にして波上に漂ひ以て「タケバ」(方言)の出現を待つ。弱肉強食は動物界の通則なり、猛場とは其最も激烈慘酷なる博擊呑嚙の活劇場、優勝劣敗の眞戰場なり。此劇場に現はるゝものは、鯨魚、鮫、鰩魚、松魚族、海鳥及び智力絶群なる人類なり、鯨魚及び松魚は鰩魚を目的とし、鮫は又松魚の種族を食はんとして期せずして集り來る。而して最も憐むべき弱小なる鰩魚は、強敵の來襲を

恐れ、常に相團結して其呑滅を避けんと欲すと雖ども、無慘なる鯨魚は時々山の如きの脊を表はし、或は萬丈の潮を吹きつゝ、數萬の松魚を率ひ之を追跡して敢て怠るなく、海鳥亦常に其上に飛揚して、鰩魚の水面に出づるものあれば直に下て之を啄む。漁夫は遙に海鳥の飛揚するの狀と鯨魚の進退とを見て、絶へずタケバの現出に注意す。既にして鰩魚は全く追窮せられ、個々に離散すれば忽ち松魚の食餌となり、團合すれば大鯨の一呑に歸す。然れ共彼等は漫りに團合して、大鯨の一呑に歸するを知らず、只だ離散の危きを知り、先を争ひて内部の安全なる場所に逃れんと欲し、遂に結んで一大團塊をなす。上部のものは水際より高く、下より漸次に推し上げられ濺々として飛跳す。是に於てか群鳥其慾を逞ふし、數百相集りて之を啄み、松魚四周より之を攻撃す。而して亦た猛惡なる鮫は脊後より來りて松魚を捕へ、鰩の



如き鯨魚は忽ち來りて其團塊を吞滅し盡くす。巨口宛も二隻の巨舟を上下に合して、其舳部を張りたるが如し、海上に漂蕩せる漁舟、一たび此狀を望むや、鯨魚の吞滅に先ち、其團塊を獲捕して以て松魚を釣るの餌となさざるからざるを以て、東より西より南より北より、先きを争ひ萬頃の風波を破りて突進し來る。第一着のものより順次に小網を入れて、彼の團塊を捕獲するの習慣なれば、其競漕の激烈なること筆紙に盡し難く、鐵膚銅腕、顔容鬼の如き漁夫共が必死となりて漕ぎ立ちたるさま、實に譬ふるに物なく、二十本のヘビに腰を抜かすポトメンをして之を見せしめば、將に愧死するなるへし。而して其着順の如き、固より審判官あるに非らず、されば其争ひより往々一大争鬪を惹起すことあり。茫々たる遠洲洋上、數隻の漁舟が入り亂れて打ち合ふさま、人をして古代海戰の狀を追想せしむるに足る。九郎判官お

り、能登守教經あり、鮮血淋漓として舵頭を染むるに至るも、各々權利を主張して格闘奮戦し、僅かに仲裁船の來るものあれば、之れに一任して事漸く解く。無警察の海上、其鬪争たる甚だ猛烈を極むることあるも習慣として一たび陸上に歸れば、怨恨互に氷解して交り平生の如し。之れ亦た一の美風なり。既にして第一番船は櫓拍子勇まなく、鯨魚の團塊を目かけて突進し、ハリ網と稱する三角形の網を突入して之を掬ひ去る、殘餘あれば第二番船亦之を行ひ、第三第四番船亦此の如くす。而して皆一回之を行ふの權利あるのみなれば、其餌を獲たると獲ざるに拘らず、此場所を離れざる可からず。漁舟に已に餌を獲れば、四邊に群集せる松魚はみな囊中のもののみ、大漁満足の叫聲、忽ち船中に破裂す。是に於て直ちに鰯魚を投じて松魚を誘ひ、各々大竿を擁して之を釣る。其法は鰯魚を以て餌となし、之を水面に游泳せし



ひれば、松魚は下より来て之を食ふ。危機一髪其未だ上方に向はざるに急に之を釣り舉げて、隣友の妨害とならざらんが爲めに、或は松魚の暴動を避くるが爲めに、堅く之を各自の左腋に抱き、以て其釣を抜き去るなり、松魚已に一たび餌を食て、頭を下に向はしむれば如何なる強力の漁夫と雖も之を釣り舉ぐることを得ず、空しく糸を切斷せらるゝのみ。而して熟練なる漁夫は咄嗟の間に、能く百尾を釣る、一餌に一尾唯だ海中より之を拾ひ舉ぐるが如きのみ。殊に「角釣り」と稱する方法の如きは、牛又は各種の角を用ひて餌形を作り、之を以て魚類を欺くなり、無智なる魚族は好餌と信じ、争て之を食ふ、故に其の餌を附するの煩勞なくして尤も輕便なり。其酣なるに方りては、間斷なく二尺の大魚、幾尾となく跳て船中に来り、鰭尾板を打て船震動し、漁夫の絶叫、風の音、澎湃たる激浪、屢々舷を掠めて、飛沫面を洗ふの

時、其壯勇奇觀たるの狀天下亦何物か之れに若くものあらんや、既にして餌漸く盡き、船中亦松魚を以て充すに至らば、意氣揚々として歸途に就くなり。戦勝の船旗は翻々として舷上に翻へり、風は颯々として征衣を吹く、水天彷彿の間遙に故山の山河を望み、順風に船を驅らせて快走の樂みを擅にするの時、爽快實に極りなく、上陸して復た其戦勝に誇るの時、快樂何ぞ堪へんや、以上は我が遠江灘に於ける松魚釣の大略にして、眞の壯勇眞の絶快何んぞ筆紙の盡し得る所ならんや。海國の健兒たるもの、風靜かに波平かなるの時、乞ふ一たび漁夫に任して其近海に遊べ、利益する所のもの蓋し漁夫の捕獲する所のものより多かるべし。汪洋たる彼の蒼海、波浪輕く揚りて公等の來り遊ぶを待つ、男子事をなす都門紅塵の裏に在らずして蒼溟萬里の外にあり、墨堤花笑ふの處に在らずして、大海月苦むの邊にあり、茫茫無邊の大



洋は、皆之れ我寶玉の倉庫、天恵の無盡蔵にして又我海國男子が遠征の途に上るの坦々たる道路なり。進んで通商貿易利益を計り、航海の權を奪ひ、或は水産の巨利を收め、社界の平和を維持せんが爲めには時に手を延ばして不逞の國を誅すべく、五洲洋中復た旭旗を見ざるの灣頭なきに至らしむるは正に是れ將來島帝國國民の任務なり。語を寄す壯年有爲の諸子たとへ公等の目的は、那邊にあるとも、少くとも海上の壯快を味ひ、果敢勇猛の氣象と剛強鐵の如きの躰格とを養ひ、而して又海波の何物たるを知りて、大に東洋の海國男兒たるの素養を作れ。



## 三春の行樂

みのかさ

書生の曆は俗人の曆と異り、一年三小節季を過ぎ寒さ身に浸む餘寒の最中、好物の燒薯も腹を暖むるたけも喰はず、孜孜として机に向ひて、半夜火鉢に火氣の既に亡せたるをも心附かずして、勉強し、やがて太陽も赤道の真上に来り、春分彼岸の頃に至れば背負ひし重荷も一度に卸せし心地、こゝに一年間の總勘定を済まして手に某級卒業の證書を握れば、正はこれ春風体に爽かに、四周の郊野皆悉く盛裝して我等の凱旋を歓迎するもの、如く、群鳥は啾々としてその功績をたゞへ、百花は艶々として、その成業に媚ぶ、山晴れて新翠履を着くるに快く、水清くして洋々以て釣るべく、以て漕ぐべし、この春光の真趣只書生の爲め



に供されたりと云ふも何人か否定し得んや、況んや學校我に供するに  
 試業後の春期休業を以てす、むべ書生の正月は實にこの春期休業旬日  
 に非ずして何ぞや、

今やこの喜ぶべく祝すべき書生の正月は既に諸君の歓迎を得んとす、  
 思うに如何にしてこの春光を樂まんかとは諸子が均しく苦慮せらるゝ  
 所ならん、淺草池邊の見世物、東叡山下蕎麥、我れこれ藪入丁稚の前  
 夜より夢むる所なるを知る、裏町の鉤張、向ふ辻のしるこ、我れこれ  
 里歸り下婢の慈母に強請る所なるを知る、蓋し彼輩の嗜好はこの外に  
 出です、偶々これらの店前を通るも主家の譴責を恐れてその嗜好を満  
 足するの時を得ず、僅かに一年二度の藪入に滿腔の希望を成し遂げ了  
 んぬ、彼等の得意知るべきなり、書生諸子の嗜好にして又彼等と擇ぶ  
 なくば即ち深く云ふを要せず、然れども諸子の嗜好にして婢女丁稚の

輩と同じきに至りてはこれ全國少年悉く下劣の極に向ひたるを證する  
 もの、深く寒心せざるべからざるの秋なり、若し書生の一人にても這  
 般一時の耳目口腹の慾のみを第一嗜好となすものあらば余輩は何處  
 までも強てその嗜好を有益の方に轉せんことを望むものなり、勿論學  
 海遊泳者の健兒中には唯の一人も斯の如き下劣の嗜好を有するものな  
 きを信すればこの場合に於ける最良消光法を講ずるも亦無益に非るべ  
 し、凡そ春は萬物の萌出るときにありて英氣潑々人間の身体上最もよ  
 く發育するときなり、故に此際に於て十分身体の攝生を務むるときは  
 その健康を保つに於て最も効力あるべきなり、好矣、書生の正月は最も  
 書生に適せる「運動」を措て、他に適當のものを見出し能はざるなり、さ  
 てその運動に至りては、各嗜好あらんも、余は殊にこの期を以て旅行  
 を勧めんとするなり、



書生に向ての四五泊以上の旅行は一年中僅かに三回のみ、即ち暑中休暇と俗人の正月と及びこの正月となり、中に就きて冷暖体に適し、衣服の軽重宜しきを得、加うるに麗かなる永暄の連晴は實に毎年春休の外にはまた求むべからざるなり、學校遊園の運動、或は一日の中になさるべき遠足、漕艇等に在りては必ずしも連休のときを待たず、且つ毎週幾回にても、之を試むるを得べきも、旅行の妙味は、この一刻千金のときを除きて容易に行うの機を得られざるべし、冬には氷滑り、夏には游泳等の特種の運動あり、且つ旅行には冬は日短かど、衣重ど、悪路とにて中々思ふ様に歩行けず、夏は汗許り出で、日中は焼かるゝが如く、また蚊軍の爲め夜間の野宿も出來ず、先づ春期の運動は旅行の特徴とすべき乎、旅行の快樂はこゝに説くを須ぬず、快樂と云はんより寧ろその精神上の利益は或は教場に於ける幾週間の事業よりも返

て増ることありと云ふて止めんのみ、而して先づ旅行につきての心得一二を云はんは(一)初旅には可成は一二人の同伴者あるを要し、(二)發程前豫の地圖(陸軍參謀本部二十万分一地圖)を充分よく見て、一日十里以外の豫定にてその何れに宿泊すべきやの日程を定め置くべし、(三)可成行路の里人と行を共にしてその土地の状況、習慣等を詳細に聞き、彼我互に比較すべし(四)旅費は豫め一日幾十錢と積りて之より多く携うべからず、各日の定費は地方によりて異ると雖も、旅籠代と草鞋代外に晝飯代等に五錢以外にて足る、何れにせよ、書生中の旅は最も心思を勞することを務むべし、費費の旅よりは窮費の旅返て味あるのみならず、有益なるものなり、(五)神社佛閣等を見るよりはその士の隠士、村夫子等を尋ねべし名所、名物等は案外感心すべきもの多からず、人間と對話するときは如何なる人にてても時に自ら發明する



ことあるべし。

## 運たためし

白雲

由來英雄豪傑は自信の強いものである、自信が強ければこそ抜山倒海の勇氣も出るのだ。蓋し其自信は多くは自分の天命を覺り天職のある所を知る所より來るのである、那翁の彈丸を怖れざりしと、ヂヤンダルの女性に似合はぬ怪勇等は方に其適例であつて、孟子の『天の將に大任を此人に下さんとするや、云々』の句等は寔に能く其間の消息を傳へたものである。

余は常陸東海岸の一漁村に生れた、雲井龍雄が『平瀨之灣勿來關、石路

劈開巖頭間、怒濤如雷紛雪起、洶去洶來海嶺山』と謳ふた彼の勿來關に程遠からぬ所で、東京灣の溜り水、鎌倉の雌波雄浪位に膽を冷せる人々には或は少しは面白い所があるかも知れない。いでや一寸其風光を御紹介申さう。

諸君が上野に上車して田端停車場に中仙道線と分れ、長鯨雲を吐て走ると多時、風雲開き盡す筑嶽の東、叱咤直に指す常磐の天坏と呻る中に、水戸の城下は夢の間に過ぎ、走ると復三十分にして汽車は鐵岩の風光を以て有名なる久慈川の大溪谷に入るのだ此雄大なる風光に打たれ心神恍惚たる中に鉄橋を二つ渡つて一丘陵を通過すると、秀麗にして瀟洒なる一漁村は諸君の眼前にあらはるゝのである。前面には茫茫たる大洋を控へ、近く久慈の一水を周らして三面莊嚴ある丘陵に圍まれ、海には眞帆片帆の漁船の影も面白いが、海邊の磯馴松をもれて立



ち上る煙燒く煙もすてられない。町と云ふのは名のみであつて全く大きな漁村なのである、是が我輩の愛する故郷なのであつて、想ひ出す度に胸が波立つ其故郷なのである。其中には曾て父も母も姉妹も兄も住で居た、あのなつかしい故郷なのである！

想ひ出せば一昨年夏の夏の休暇の事だ、連日の雨で波濤を披て遠泳の快も取れないが、船を出して釣魚の樂に耽るとも出来ない。讀書三昧に日を送る實は脾肉の嘆に堪えなかつたのである。漸く晴れたので川邊へ出掛て行て見ると、川はすばらしい洪水となつて居た。今しも水は出花である、昨日迄並んで居た川よけの杭は今日は大方は見えなくなつた。そればかりではない、我輩の處は河口であるから、川上の方に氾濫して堤を頽し野を滲して居る一面の大水は、此處へ來ると一時に瀧の瀨をなし下坂を作て海に注ぐのだ、其川杭にせかれて湧き返る水

の有様等は全く高さ丈餘の瀧の容体である、特に凄いのには平常より十倍も廣くなつた河口の有様であつて渦をなして流るゝ水は矢よりも迅い。其水面を眺めて居れば五分立たぬ中に眩暈を感じる位だ、彼の奔湍は謝進し渦流は人立すと云ふのは大方彼様な有様と云ふのであらふ、亦波と河水との争闘は一層壯快である。マンダラを打て流るゝ泥水は面も振らず馳せ下て、猛り狂ふ怒濤に向て驀然に衝突すると、此に一大混戦が始まる。是が面白い、水源八溝(常陸第一の高山)の谷から流れて來たらしい根拔の杉等は大小打ち混じて丸で木箸を茶碗の中にかさまはす時の様に、自由自在に臥せられたり起されたりして居る、此様な壯觀に接して、我輩は數日の鬱を初めて散じた、然し中々それでは満足しない。自己流ではあるが我輩平生大平洋の荒潮に鍛へ上げた健脚壯腕を試験するのは此様な時だ、萬一海へ吐き出された所が三



四時間も泳ぐ氣なら。死ぬともあるまい、少し鯨呑なのは波打際と、(岩石多し)材木とだが、なに是とて大したとはゐるまい。此處で死ぬ位なら、どうせ大事業は出来ないうさ、是も一つの運うんためし、久慈の漁師ばらの荒膽を抽き抜さくれるも一興だ」と、よせば善かつたのに、よしない大望心を起したのである。今思へば實に身の毛もよだつ許りだ。

いきなり、素裸になつて杭の上に立つた、後ろに十人許りの小供等が見物して居たが、彼等は之を止めやふともしない。蓋し彼等は余が平素の手腕を信じて居るのである。我輩は並立せる川杭の最終のもの、上に停立し、徐ろに川水を見渡した。流石に胸の轟かぬでもない。然し牢たる決心は早や抜くことが出来ない。先づ腰に捲きし手拭を取てチヂリ鉢巻をした。叱咤一聲身を跳らして忽ち亂水狂濤の中に投じた此

後耳に聞くものは琴々たる水聲許りで後ろの騒ぎは少しも知らない。投ずると同時に其瞬間である渦捲き下る奔湍は余が体を奪つて七八間下流に掃き落した。夫れは其筈である、此處は川杭にせかるゝ、水の吐口である、流石の我輩もこれには實に驚いた。驚きの餘り一時は立ち戻らふかと思つた。然し男子として其様などは出来ない、まゝ運は天だ、乗り掛つた舟だ、やり通せと抜き手を切て泳ぎ始めた。水勢の凄じさは亦陸上で見たとは格別である。流れ下る木材を押し分け潜り抜けて、游泳の秘術を盡した。然し凡ての事は無益である、千辛万苦して泳ぎ上りし頃は、はや餘程疲勞した。此處にて上流に見ゆる洲渚を眺めながら力及ばず海中に流され行く心中は實に非常ならんとの想像に反して、自分は一向平氣であつた。然し此處に至ては最早や決心せねばならぬ。如何程水勢と争ふとも徒に精力を費すのみにて、却



て危険である、寧ろ身を提げて大洋に流出し、身を怒濤の間に托して徐ろに上陸の策を講ずるの外はない。そこで方向を海の方に取て唯身を河水の行くが儘に任した。

斯く決心したる以上は今は動することを要しない、矢よりも早き水勢に乗じて悠然として泳ぎ始めた。斯く決心すれば今は中々心安い、唯戒心すべきは波打際の岩石と流れ来る材木とである、見る／＼我輩は押し流されて河の海に注ぐ處に達したのである。怪む可し水に捲き上げられたる砂が吾輩の足に觸る、如く感じた、訝かりながら若しやと思て立たふとした、然し無益だ、激烈なる水勢は我輩の足を拂て体を直立たすとが出来ない、立たふとすると徒に全身を沈めらる、許りである。丁度此時である、吾輩が川流れになつたとの警報に接して跣足の儘で走り付きし我輩の兄は、頭のみ出して流れ行く吾輩を見て居た

が流石に心配にはなるもの、游泳のたしなみある身の、よもや溺死はすまじと思ひしに此時全身の沈むを見て全く色を失たると後に我輩に語つたそこで吾輩はやつとのとで脊を立て、見ると、水は臍迄位としか思はれないが、何にせよ其水勢の凄じさは足をさらつて、逆も立つて居ることが出来ない位だ、やつとのとでもかまはぬが、漸く安全なる渚洲に近いが、ふと後を振り返り見て驚た、一艘の輕舸は六七人の若者に乗せ、艣拍手勇ましく流に従て矢の如く飛ばして來たが、見る間に余の後十間程の處に來たのである、余は其若者共の面を見て直に吾輩を救助に來たのだと云ふとを知ら、彼等も吾輩が獨り泳ぎ着たのを見て安心したらしかつたが、今度は船が流され様とするので彼等は大騒ぎである、そこで我輩多少氣の毒の感があつたから、手傳て其船を渚洲に引き上げてやつた。彼等は笑た「助けて來て却て助けられ



た」と皆質朴なる愛すべき漁師共である。そこで吾輩は救助船の由来を尋ねた、彼等の答たのは先づ斯様である、余が杭の上より水中に飛び込みと同時に忽ち七八間押し流された、之を見たる小供等は流石に大事だと見て取て、「ア、飛び込だ！」「と高聲に叫び出し、「救けろ！」「と騒ぎ出したから、たまらない、それ救助船と云ふので近邊の漁師七八名、取る物も取り合へず船を出したが、側櫓、軸櫓の取り違つたのも知らないで、船を飛ばして来たのである。今や村内は鼎の湧くが如き騒ぎで河岸は彼の通りの見物人であると指す方を見るに、成る程今迄気が付かなかつたが、實にすばらしい人出である。町の全河岸十町許の間は人の黒山をなして、且つ右方の懸崖の上まで人が満ちて居る、余はよしなき悪戯に全村を騒がしたのを悔たが亦一種云ふ可らざる愉快を感じた。即ち自ら天命のある所を知たのであ

る、余は斯の如き場所で死ぬものではない別に大事業を成すべき天職を有するのだと云ふことを確信し始めた。是が後年探奇旅行で思ふ儘の冒險を爲し得たる原因であらふ。そこで我輩は歸路も一つ此洪水を泳ぎ切て阿部豊後守を氣取らふと思たが救助に來た漁師共がたつて止めるので已むなく船で還るとに定められた、そこで船を十町許川上の方へ引き上げて檣柏手勇しく町の方へ歸て行たが、皆呆氣にとられて無事を祝する詞はあるが、無謀を咎むる忠告は聞かない。寧ろ一種の凱旋である。然し茲に一の心痛がある、それは如何に我が老母が心痛し給ひしかとの心配である。實は其數日前であつた、一人の書生が小舟に乗て河口から吐き出され、漁師に救助されて歸て來たのを、誰れ云ふとなく余が流されたと誤り傳へて（余は常に此種の悪戯をなす故ならん）我家に告るものがあつたからた



雲山耶終

またなら、我が母は平素容易に海岸に出たことのない身なるに係らず、倉皇逃走の儘で眞替になつて、殆んど半狂亂になつて海岸に駆けつけたと云ふことを聞いた。それはい自ら罪深いとだと思つたものを今日は眞實よしない亂暴をして、さぞや母上の驚き給ひしならんと夫れのみ、心痛して悄然家に還つたすると意外だ、母上は平常の通り悄然として余を迎へられた。余は恐れ入て一向余の無謀を謝したるに一言の譴責なきのみか聊か賞られたらしく感せられた。聞けば折善く耕作巡檢に行つて、留守であつたと云ふのである。余は實に天に向て感謝を捧げた、然し昨年我母死去の際の遺言の一は、確かに「身体を重んじて餘を亂暴するな」との一言であつた、おはれ此母をして此言をよましむゝ余は寔に不孝者であつた。

雲山耶終

明治三十四年四月廿一日印刷  
 明治三十四年四月廿三日發行

定價金貳拾錢

編輯兼  
發行人

戶所竹雄

東京市神田區千代田町二番地

印刷人

藤澤外吉

東京市神田區表神保町二番地

印刷所

日本印刷株式會社

東京市神田區仲藏樂町四番地

發行所

博報堂書店

東京市神田區千代田町二番地

不許  
 復製



# 猛虎一聲

全一冊

定價金廿錢

郵税金二錢

本書は、都下に於ける學生の弊風を排撃せんが爲めに、ある健兒の團結をなせる青年諸氏が、忌憚なく快筆を揮はれたる者なり。目下、書生間に於ける弊風は、上は大學より、下は小學に至るまで、波及し悉あるものこれを憂へざるなし。されど、學生の真相は、學生にあらざれば、知り難きものあり。於是乎、この書に筆をさりし青年諸氏は、慷慨沈痛の氣を呵して、學生の乱行汚行を責め、改弊の途に就かんことを忠告せんとし、學生間の真相を語りて、一々非難を加へ諷見を指摘せられたり。他年都下に有て、學生の情態に通ぜしに加へて、自ら節を守りて風せざる氣概を有せしとなれば、其論議するところ痛絶快絶を極め、此書一度び出づれば、乱行の學生は愧死すべく、篤行の學生はますます警策する便ならん。特に、父兄たるもの教師たるものは、必ず一讀して子弟を監督する標準となすべきなり。若し夫れ、文章の痛快にして談鋒の鋭利なるに至りては、滔々たる軟文字をして、屏息せしむるに足るものあり。江湖の士、必ず一本を座右に供へられんことを望む。

發兌

東京市神田區  
千代田町二

博報堂書店



貴族院議員公爵二條基弘君題辭  
前文部次官柏田盛文君題辭  
白井毅君吉田頼吉君合著

# 學生の憲法

全一冊

定價 金拾貳錢

郵稅 金貳錢

郵券代用一割増

●生徒卒業證授與式場之圖鮮明寫眞版入

方今學に志すもの往々中道にして廢することありこれ其はじめに當りて目的の撰擇針路の方向を誤れるによるものなり。又青年有爲の士にして學風の日類類敗するはこれ日常の素養に缺くるところあり。著者此に見るあり學生の爲に進路の標準と日常の心得とを極めて平易の文章を以て勉めて懇切に説示したるものなれば小學校に於ける生徒の賞與品として最適切なるべく又以て學生が日夕の鑑とすべく座右の銘となすべく又以て小學校に於ける修身科教授の参考として適切なるを信するなり。希くは江湖の士一讀の榮を賜へ

東京神田區千代田町二番地  
(電話本局一四四)

博報堂書店

東京府知事

千家男爵題歌  
博報堂 編纂

定價金參拾錢 郵稅四錢

第一輯

# 東京營業便覽

今回東京營業便覽を發刊して江湖諸君の爲に東京八百八街の案内者たらんとすこの小冊子の内容は東京各區を貫ける大通り即ち新橋を起點として京橋、日本橋、萬世橋、上野、淺草、淺草橋より本町三丁目、本石町より淺草橋(馬車鐵道全線路)人形町通り、小川町より九段、湯島切通しより本郷通間の兩側毎戸漏さず、家毎に取調べ各戸の氏名、營業、商號等を簡易明瞭にしるしあれば、何町の何處に本屋あり、何町目に唐物屋、其隣に時計屋あり、其又隣りは太物屋なり、といふめんばいに、手に取る如く知らるべし

發行所

東京市神田區  
千代田町二番地

博報堂書店



貴族院議員男爵本多副元君題辭  
米國「ロバート・ストール」氏原著  
日本「運動界」編輯局補譯

# 器械體操

全一冊袖珍美本  
紙數百四十餘頁  
定價十五錢  
郵稅二錢

『運動界』雜誌社こゝに見るところの挿畫六十餘を加へて、初歩より丁  
り、米國大家の原本により、精密なる鐵棒、平行棒、鞦韆、木馬の四に  
冊子となして世を利せんと計らる、本書の鐵棒、平行棒、鞦韆、木馬の四に  
技毎に、其影響を受くべき筋骨を擧げて、實試者に便にせり、これ普通の雜  
書と大差ある所以なり世の體育に志ある人及中小學校等に數鞭をとらる  
諸氏は、試みに一本を座右に備へて、以て朝夕の友となさば其裨益する所  
決して小少ならざるべきなり

東京市神田區千代田町二番地

發兌

(電話本局 一四四四)

博報堂書店

皇太子殿下  
總裁 公爵二條基弘君  
議長 男爵本多副元君

## 帝國少年議會

議事録 毎月一回發行 見本七錢入會 金十

の御 會費一ヶ月金七錢 半年前金七十五錢 議事録 内容 特別  
上覽 四十錢 一ヶ月前金七十五錢 議事録 内容 特別  
を辱 室●文庫●立談所●電話室●會食室●口繪眞寫版數葉  
ふす ●習畫帖●習字帖●其他

本議會開設以來茲に一閱年號を累ぬる十有六本年一月を以て  
第二期第一號を發刊するに至れり議員總數六千餘名院外購讀  
者一万余名青少年雜誌界 公爵二條基弘君 本  
中の霸王たり加ふるに今回 公爵二條基弘君 本  
の總裁 け新世紀に於ける代議士たる青年諸子に貢獻する  
處あらんとす此際奮て入會せよ

東京市神田區千代田町二番地  
(電話本局 一四四四)

帝國少年議會



文部省官房長重岡薫五郎君序文  
高等教育會議員湯本武比古君序文

小林茂理君著

### 通俗 議論の杖

説明圖數十個入菊版美本  
全一冊 定價金貳十五錢  
郵税 二 錢

本書冠して通俗論理と云ふ故になるべく八ヶ間敷學語をさけ何人にも論理の何ものたるを解し易き様一々例證を擧げて説示したるものにして演繹、歸納の二法を不知不識の内に解得する仕組なれば苟も將來代議士たり志士たる青年諸君は一本を座右に備へ以て議論の杖とせられんとを

東京神田千代田町

發 兌

博報堂書店

(電話本局一四四)

運動界編輯局編輯

# 春燕杖鳴

紙 數 貳 百 頁  
袖 珍 美 本  
定 價 拾 三 錢  
郵 税 貳 錢

旅行は人生快樂の一なり、而して、其快樂も方法の如何によりて、全く無益有害なるもの多し、「春燕杖鳴」は、日本青年の銷々たる健兒が、校課のいとまに、一簑一笠にて名山大川を跋渉せし記行なめつめしものにて、冒險もあり、風雅もあり、加ふるに天真爛漫の筆を以て、奇絶快絶の壯舉大觀を寫す、決して世間に流布せる旅行日記や、贅澤三昧に試むる山水遊行の比にあらず、今や世は柔弱流るゝの評あり、然るに、簑笠にて名山を登攀せる健兒あり、糧食を背にして勝區を訪へる好漢あり、一文ふしにて富士をよじしもの、野宿して深山を探りしものなど、磊落粗豪の快舉は幾多の少年子弟をして、神飛び魂馳せしめん、況んや皆なこれ實地の經驗談なるをや  
江湖青年少年諸君は、一本を座右に携へて三伏の窓下に、これを讀まば、暑を忘れ邪を馳せると決して疑ふべからざる所なり

發 兌

東京市神田區  
千代田町二番地

博報堂書店



東京教育社編輯所謹編  
皇太子殿下御肖像  
鮮明寫真版入

# 新刊 皇太子殿下御肖像

全一冊美本  
定價上製九錢  
並製七錢  
郵税金二錢

申すも畏こけれど、皇太子殿下が、御孝順の念に厚く、御聰明に  
渡らせられ、仁慈の御心に富ませらるゝは、吾人臣民の常に欽仰  
し奉る所なりとす、而して、妃殿下の御淑徳高くおはせらるゝ  
は亦萬人の均しく仰ぐ所あり。本書は將來の國父にて在ます  
皇太子殿下の御盛徳と、將來國母にて在ます、妃殿下の御美徳  
を慕仰の餘り洩れ承る處を蒐め茲に謹編せしものなり。乞ふ購  
讀の榮を賜へ

東京神田千代田町二番地  
(電話本局百四拾四番)

博報堂書店



